
落ちこぼれと美鬼

The ROCK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落ちこぼれと美鬼

【Nコード】

N2761W

【作者名】

The ROCK

【あらすじ】

闇にはびこる『鬼』の討伐を生業とする『伏鬼衆』でありながら、落ちこぼれの烙印を押された少年・鈴也。

伏鬼の名門・御堂の家を飛び出したはいいが、彼を連れ戻そうとする従兄妹・貴子との追いかけつこの日々は終わらない。

ある日、鈴也は夜の公園で、人外的美貌を持つ少女・紫炎と出会う。利害の一致と勘違いから、2人はとある契約を結ぶことになるが…

1（前書き）

どんなもんかな、と思って投稿してみました。
お目汚しですがどうぞ。

闇は恐怖を司る。

人知れず暗躍する異形の存在——『鬼』。彼らが蠢くのが闇の中であり、彼らの存在はまさに、人間にとって恐怖以外の何物でもない。

現世の闇にまぎれ、人を食む妖しの物。抗う術のない者はただ餌食となり、人は闇を恐れるようになった。それでも、人間に対抗手段が残っていなかったわけではない。特殊な鍛錬の末、『鬼』を討つ力を手に入れた者がいた。

彼らが持つ剣は、堅固なる『鬼』の皮膚を切り裂く事ができた。彼らの使う術は、強大なる『鬼』の生命を削り取る事ができた。

人を守るべく鬼と戦い続けるその一族を、『伏鬼衆』といった。

闇を恐れる人々が、眠りについていてであろう時刻。こんな時間に外を出歩いている人種など、1つしかない。

御堂鈴也は夜道を走っていた。そして、御堂貴子も走っていた。

鈴也が逃げて、貴子が追う。2人の距離は一向に縮まらない。

貴子が必死で走っているのに対し、鈴也にはまだまだ余力がある。貴子が走りにくそうな巫女装束を着ているのも、この鬼ごっこが終わらない理由の1つだろう。鈴也はTシャツにジーンズ、ジャケツトという身軽さ。だが、2人の距離は広がりもしていなかった。

「待ち…なさい、鈴也！」

貴子の叫びが、夜の静寂を切り裂く。ここが公園でよかったと、鈴也は思う。住宅街なら安眠妨害になるところだ。

「もう、逃がさない、から…」

走りながら叫び続けたのだろう、貴子は息も絶え絶えだった。無

理もない、気がつけば1キロほど必死で走っていることになる。
ストレートの髪が汗に濡れて、まるで黒い絹のようだ。

「おとな、しく、家に、戻って、きな、さい！」

「やだね」

鈴也は器用に、振り向いたまま走っている。諦めたのか、貴子の歩幅がみるみる縮まり、やがて草履を引きずる音が響いた。そろそろ限界だ。

「仕方、ない、でしょ、鈴也なんて、弱いん、だから……」

足を止めた貴子はもはや、肩で息をしている。今なら確実に逃げられるだろう。だが、鈴也もまた、後ろを振り向いたまま走るのをやめた。

「み、御堂の、家の、者が……下手な、『鬼』に、やられ、たら……」

「『伏鬼衆』名門の名折れか？」

鈴也の声は、自然と冷たく硬いものへと変わっていく。鈴也の両親が亡くなった時の、御堂家の反応を思い出していたからだ。

鈴也の両親は、15年近く前、幼い鈴也を連れて本家を出ている。伏鬼衆として才能の片鱗を見せることもできない我が子に、普通の生活をさせようとしたと聞かされている。だが、名門としての体裁を守るため、落ちこぼれの鈴也を両親もろとも放逐したのだと、鈴也自身は思っている。厳しい周囲の目に、両親が耐えかねたのかも知れない。詳しいことは聞かされなかったが、本家を出た両親は「落伍者」としてひどく迫害されたはずだ。それぐらいやつてもおかしくない家だった。

両親と鈴也は本家の目、そしてしがらみから逃れ、ひっそりと暮らし始めた。父は伏鬼以外の仕事を見つけ、細々としながらも平和に過ごしていた。だがその平和は、3年間しか続かなかった。小学校入学を迎えた年のある日、鈴也が鬼に目を付けられたのだ。そして、両親は鈴也を守るべく戦い、その鬼の手にかかって命を落とした。

鬼は本家の人間たちによって撃退され、幼い鈴也は本家に連れ戻された。誰一人、両親の死を悼む人間などいなかった。それどころか葬儀さえ行われず、その死は「家の恥」として隠匿された。

それが、御堂本家の出した結論だったのだ。

「そうよ…御堂の者が、鬼にやられるなんて、あつてはならない、事なの！」

貴子は、少し逡巡してから言った。手にしていた白木作りの小太刀を、鞘のまま鈴也に突きつける。少しは息が整ってきたらしい。

「いくら『はぐれ伏鬼』を気取っても、鈴也がやられたら御堂の名に傷がつくわ」

鈴也は心の中で「望むところだ、傷だらけになればいい」とつぶやいた。当然、貴子に聞かれたら面倒なので声には出さない。

もったいないな、と鈴也は思った。貴子はせっかく美人に生まれたのに、御堂の家の事となると途端にヒステリックになる。名門に生まれながら、低い能力しか持たない鈴也をなじる時、あるいは自分の能力を誇らしげに語る時、彼女の顔は鈴也の苦手な顔になる。

（御堂の家の奴らと同じ顔してる…）

「何を、じろじろ、見てるのよ…？」

「…別に」

「……そう」

貴子はもはや語る言葉もない、とばかりに、手に持っていた小太刀を構える。鞘を払わないのは従兄妹としての情か、それとも刃を使うまでもないということか。いずれにせよ、貴子が本気で攻撃の意思を見せたことに、鈴也は軽い衝撃を受けていた。

（貴子も、あいつらと同じなのか…？）

両親を失い、御堂家の離れで孤独に暮らしていた10年間。その間、自分から鈴也に声をかけてきたのは貴子と、1人の使用人の女性だけ。かけてくる言葉はきつくても、自分に構ってくれる貴子の存在は、鈴也にとって救いだった。その彼女が、今は自分に武器を

向けている。鞘のままとはいえ、危険なことに変わりはない。

「これ以上、1人で伏鬼を続けるつもりなら、手加減しないわよ！」

「っ!!」

自分の声を合図にするかのように、貴子が前へ跳んだ。鋭い踏み込みで相手の懐へ飛び込み、急所へと確実に小太刀を打ち込むのが、貴子のスタイルだ。スピードを生かすため、小太刀という小ぶりの武器を使っている。腕力のなさをハンデではなく、逆にメリットにしているのだ。

鈴也からすれば、完全に虚を突かれたというしかない。

（もらった!!）

貴子は心の中で快哉を叫ぶ。傷つけるつもりはない、ただ鳩尾に突きを打ち込み、鈴也の動きを封じるだけだ。身構える前の鈴也に一撃を加えられる、絶妙のタイミング。

ただし、貴子のコンディションが万全だったなら、の話だが。

「えっ!?!」

叫んだのは、鈴也ではなく貴子だった。

鈴也との鬼ごっこで体力を使い果たしていた貴子の足は、思い通りに動いてくれなかった。踏み出した右足がふらつき、軸にしていた左足に引かかる。つんのめる上半身。だが、それを支えるはずの右足はまだ地についていない。

さきほどまでのキリッとした表情はどこへやら。バランスを崩し、慌てふためく貴子。

「あっ……きゃあ!!」

「うわっ!!」

遅まきながら身構えようとしていた鈴也からしても、その動きは予想外。自分に攻撃してくるはずの貴子が、体ごと突っ込んでこようとは…。

どしゃ。

貴子と鈴也は、もつれあつたまま地面に倒れ…。

「いつて…何やってんだよ、貴子…」

もつれあつて転ぶということは、1分の隙もないほど密着しているということだ。そして、鈴也が顔を起こすと、そこには巫女装束に包まれた柔らかなふくらみが。ふによ、という感触を顔面に感じると同時に、鈴也は自分の置かれている状況を理解した。

「きゃああああ！　何やってんのよ鈴也あ！！」

次の瞬間には、思い切り頬をひっぱたかれていた。

「理不尽にもほどがある…」

じんじんと痛む頬をなでさすりながら、なんとか貴子の下から這い出る鈴也。まあ、役得の代償と思えば、安いものだったかもしれない。鈴也の頬が赤いのは、決して叩かれたからだけではなかった。

「こほん」

咳払いをしたのは、鈴也か貴子か。それとも、両方だったかもしれない。

「まあ、アクシデントだ。気にするな」

鈴也は務めて冷静に言った。自分の胸元を隠すような姿勢のまま、真つ赤な顔で睨んでくる貴子から、つい、と目をそらす。

「あんたは、ちよつとくらい気にしなさいよ…」

そんな貴子のつぶやきも、鈴也には届かなかった。

「ちよつと、聞いているの！？」

悔しいような腹立たしいような色をにじませて、貴子が続けるが、鈴也はあさつての方向を見たまま。その視線の先には、綺麗に剪定された植え込みがある。

「……貴子、あれ……」

鈴也の視線は、植え込みの奥に向いていた。そこには、すらりとした人影が。

「何よ……って、あれ、誰がいる！？」

こんな夜中に外をうろろしているのが、ただの人間であるはず

がない。

人影が、音もなく動いた。植え込みを避けるように回り込んで、鈴也たちのいる通路に、するりと現れた。

月明かりの下、漆黒の衣に身を包んだ人影は、人外の美貌を備えていた。

腰まで届く、真っ白な長髪。透き通るような白い肌の中で、ただ唇だけが血のように赤い。いや、良く見るとその瞳も、深い紅の色を宿している。

スツ…と、静かに人影が手を上げた。精緻を極めた彫刻を思わせる、白磁のような纖手が、ゆっくりと鈴谷に向けられる。

「来い」

人影が、静かに告げる。

その声を聞いて、初めて貴子は人影が女性であることに気がついた。体型を見れば一目瞭然だったのだが、あまりに異様な美貌を前に、気が回らなかったのだ。

その直後、女の言葉が鈴也に向けられたものであることに気づき、貴子は狼狽する。

「鈴也、やめなさい！」

声に釣られるように足を踏み出した鈴谷に向かって、思わず貴子は叫んでいた。

1（後書き）

文字数の都合で、半端なところで切れました。

鈴也はただ綺麗な女の子に惹かれているだけだと思っているに違いない。だが、あの女はそんな生易しい存在ではない。全身を刺すような鬼気を発しているのが、なぜ判らないのか。

「その女から、離れなさい！」

重ねて叫ぶが、鈴也の足は止まらない。そのとき、鈴也の前に立つ女が、ゆっくりと息を吐いた。まるで、ため息をつくように。

「ああ……やっと思つた……」

涼やかで、大人びた声だった。血のように赤い唇からこぼれる声は、同じ女である貴子さえ、思わずゾクリとするなまめかしさを持つていた。これは、まずい。

そう思つたときには、鈴也と女の距離が詰まっていた。

「離れて！ その女は……」

間違えるはずもない。人並みはずれた美貌だけではなく、気配が人間のものではないのだ。鈴也はそれに気づく間もなく、女の鬼気に打たれて身動きもできなくなつてしまつたに違いない。

だが次の瞬間、鈴也はこともなげに言い放つた。

「鬼だろ、おまえ？」

「そうだ」

実にあつさりしたやりとりだった。聞いている貴子が呆氣にとられたほどだ。が、貴子はすぐに顔を真っ赤にして怒りをあらわにする。

「ちよつと鈴也！ 何をのんびりしてるの！」

鬼だとわかつていて、なぜ鈴也は何もしないのか？ 伏鬼の名門たる御堂の者の態度ではない。少なくとも、その名に誇りを持つてゐる貴子からすれば、鈴也の態度は見過ごせるものではなかった。

もつとも、見過ごせない理由はそれだけではないのだが……それを声高に言つのは、貴子としては抵抗がある。

「刀を抜きなさい、鈴也！」

そう言いながら、貴子は素早く小太刀の鞘を払う。さつきはみつともなく転んでしまったが、本物の鬼が目の前にいるとなるとそうはいかない。精神力と怒りと、ほんのちよつとのモヤモヤした気持ちを活力源に、貴子は猛然と女に突進していく。

「鈴也から離れ……じゃなかった。散りなさいっ！」

もう鬼ごっここの疲労から回復したのか、貴子の足取りはしっかりしたものだった。女と鈴也の間を割るように滑り込むと、そのまま構えた小太刀を一閃する。

「あ、おい……！」

キン、と澄んだ音が辺りに響いた。

小太刀が鬼の皮膚を切り裂いた音ではない。その証拠に振り抜いた小太刀の刃は、根元からぽつきり折れていた。

「なっ……！？」

「おお、すげえ」

「何を感じしてるのよ！」

得物を折られた衝撃から、貴子は一瞬で立ち直った。間の抜けた鈴也の声が、貴子を苛立たせる。

「後にしろ」

とん、と女が貴子の肩を押す。

「きゃっ！」

それだけで、貴子は勢い良く地面に転がった。いったいこの女は、どれだけの膂力を秘めているのか。

だが鈴也は、そんな事はまったく気に留めていなかった。貴子の着物の襟元が大きく開き、胸の谷間がしっかりと見えてしまっていたからだ。いくら名門の家に生まれた伏鬼衆とはいえ、これでも鈴也は思春期の男の子なのだ。露出度ゼロの超絶美女よりも、胸元全開の幼馴染に目を奪われたとして、何の不思議があるうか。

「まだ、上があったか」

鬼が抑揚のない声でつぶやいた。

「ちょっと、ぼーっとしてないで手伝いなさいよ！ それでもあんな、御堂の……」

鈴也に遅れること十数秒、初めて貴子は気づく。何やら、自分の胸元がスースーすることに。その間、鈴也の視線がずっとそこに注がれていた事にも、遅まきながら気がついた。

「きゃあああああああああ……！」

闇をつんざく貴子の悲鳴。次の瞬間、貴子の鋭い視線が鈴也を貫く。

「なに見てんのよ……！」

「わっ、落ち着け貴子！ 相手が違うだろ！」

慌てて襟を深く合わせて立ち上がった貴子は、折れた小太刀をぶんぶん振り回しながら鈴也に突っかけていく。が、その小太刀は、横合いからするりと伸びてきた白い手につかまれた。

「離しなさいっ！」

裂帛の気合をこめて、貴子は鬼の手を振り切ろうとする。だが、鬼は掴み取った貴子の腕を巧みにひねり上げる。痛みに顔をしかめながらも、空いた左手で拳を作り、鬼の顔面を狙う。

「このおっ……！」

「……うるさい……」

わずらわしそうに、鬼は貴子の左手をも受け止め、背後から腕ごと抱きこんでしまった。じたばたともがく貴子を軽々と持ち上げると、そのまま朱色の袴に手をかける。

「下を剥いたらどうなるのか、見せてみる」

鬼の言葉は、鈴也に向けられていた。

「はあ………？」

「ちょ、ちょっと！ あんた何するつもりよ……！」

不吉な予感に、貴子の血の気が引く。

鈴也はわけがわからないまま、何となくドキドキしながら事の成り行きを見守るのみ。

「見せろ、人間の男。その極上なる精の極地を」

鬼は鈴也に語りかけながら、貴子の袴をつかんだ手に力を込める。鈴也はその段階になって初めて、鬼が何をしようとしているのかを理解した。

（こいつ、俺を欲情させようとしてやがる！！）

人間の精気は、欲情すればするほど質が高まるといふ。貴子の服を剥ぐことで、鈴也を興奮状態に導く事こそが、この鬼の目的だ。

鈴也自身にとっては身の危険、貴子にとっては…まあ、いろいろな危険が迫っている。にもかかわらず、鈴也は貴子の袴から目が離せない。しつこいようだが、鈴也は思春期の男の子なのだ。

「嘘でしょ！？ ちよつと…いやーっ！ やめてやめて、やだーっ！！」

袴をつかんだ鬼の手が、無造作に動いた。
びりいいいっ！！

「あ」

鈴也の間抜けな声。

引き裂かれ、ぼろ布のようになって鬼の手にある朱色の袴。
なぜかはだけている貴子の着物。

そして、その隙間から覗く下半身…というか、真っ白な下着。

「きゃあああああああああああああああ！」

そして貴子の絶叫。

「見るな、見るな見るな見るなーっ！！」

わめきながら、じたばたともかく貴子を、鬼は無造作に投げ捨てた。

「へ？」

先ほどの鈴也よりさらに間抜けな声を出す貴子には目もくれず、鬼が鈴也に近づいていた。

「ああ…もう限界だ」

がしっ、と鬼が鈴也の顔をつかんだ。これはもう、抵抗するだけ無駄だろう。鈴也には、貴子を片手であしらうような鬼をどうにかする術はない。

「えーと…できれば死なないように、よろしく頼む」
せめて命ばかりは。

「了解した」

「ちよつと鈴也、何言つてんのよ!」

貴子が慌てて立ち上がり、ずんずんと歩み寄ってくる。

「馳走になる」

そう言つと、鬼は鈴也に顔を近づけた。不穏な気配を感じた貴子の足が速度を上げる。

「ちよ、や、待ちなさいよあんだ!」

だが、鬼は貴子より素早かった。貴子の手が鈴也に届く前に、その血のように赤い唇が、鈴也のそれと重なっていた。

「あーーーーーっ!」

絶叫したのは、鈴也ではなく貴子だった。

「何してくれてんの! 私…それ、私の…じゃなくて、離れなさい、誰に断つて鈴也に……」

何やら錯乱して叫び散らしている貴子の声を、鈴也はどこか遠くに聞いていた。いや、むしろ遠ざかっているのは自分の意識か。

（う…力が抜けるなあ…精気を抜かれるところなのか…いや、しかし柔らかいな、唇…って、それどころじゃないか。そういえば、貴子って和服でもパンツはくんだな。あ、でもブラジャーはしてなかったけど…それにしてもこの鬼、美人だなあ…）

朦朧とする中で、鈴也の思考は支離滅裂だ。

（あれ、だんだん気が遠くなってきたぞ…まあいいか、なんか気持ちいいし、このまま寝てしまおう）

後ろでは、まだ貴子がぎゃーぎゃーとわめいている。腕を引っ張られる感覚があるので、鈴也を鬼から引き剥がそうとしているのだろつ。

10秒ほども吸われたらろつか。鬼の唇が、ゆっくりと離れていく。

「ふう……なんとも極上な」

美女との口付けの余韻に浸る余裕もなく、今にも倒れそうな鈴也。その体を、鬼はしっかりと支えている。貴子にはその姿が、「これはもう自分のもの」と主張しているようにさえ見えた。

「鈴也！ 鈴也、しっかりしなさい！」

がくんがくんと揺さぶられても、鈴也の意識はぼんやりしたままだ。そして、鬼が鈴也を離す気配もない。

（あゝ… もういいや… 疲れた… 寝ちゃえ）

「ちょっとあんた、鈴也を離して！ 返しなさいよ！ 聞いているの

！？ ねえ！！」

ヒステリックな、あるいは必死な貴子の声を遠く聞きながら、鈴也は自分の意識を手放した。

目が覚めたとき、鈴也は自分の部屋にいた。

貴子の前で倒れてしまったのだから、御堂の本家に連れ戻されたかと思っただ、間違いなく自分の部屋だ。目の前のラックに並んだお気に入りの笑いDVDを見て確信する。厳格で知られる伏鬼の名門・御堂本家の邸宅に、こんなものがあるはずがない。たぶん。

ここは5年ほど前から、鈴也が住んでいるマンションの一室。2LDKで、以前は両親もいたが、今は鈴也が1人で住んでいる。ちなみに父親が買ったこの一室を、御堂本家が処分しなかった理由は知らない。

「起きたか」

「うわっ！」

なんとなく現状を把握しつつあった鈴也は、突然かけられた声に驚いて上半身を起こす。目の前にいたのは、絶世の美女だった。鈴也の記憶が正しければ、この美女は鬼だ。どうやら、昨晚のことは夢ではなかったらしい。

「えーと…名前、聞いたっけ？」

「紫炎だ、人間」

短く答える鬼。

さて、何から聞けばよいものやら。とりあえず…

「人間は俺以外にもいっぱいいるから、名前で呼んでくれ。鈴也だよ」

「理解した」

せっかく教えたんだから、呼んでみてほしかったが、それは後回しでいい。何よりも、まず状況を知りたかった。

「よし。じゃあ確認だ。あれからどうなった？」

「質問の意味がわからない」

「貴子はどうした？」

「誰だそれは」

まともな返事が返ってこない。それにしても昨晚の出来事の中で、貴子の存在をこうまで無視するとは大胆な鬼だ。貴子の方は必死で突っかかっていたし、何より彼女は伏鬼衆。紫炎からすれば天敵といていいはずなのに。

「まあいいか。で、どうやってここへ？」

「歩いて」

「いや、そうじゃなくて」

「？」

小首をかしげる紫鬼。あ、かわいい…という感想は、口には出さなかった。

「何でお前がうちにいる？」

「ここが鈴也の家だから」

「いや、ちよつと意味がわからないぞ」

紫炎の受け答えは不明瞭で、鈴也は困惑する。が、どうやら彼女は自分を家に連れ帰ってくれたようだ。だが、どうやって？ 貴子が紫炎に、素直に鈴也の家を教えるとは思えない。もちろん、鬼に連れ去られる鈴也を見逃すとも思えないが、まさか…。

「昨日、俺と一緒にいた女を覚えてるか？ 彼女は？」

「うるさい雌だった」

「雌って言うな。あと感想を聞いているわけじゃない。で、どうしたんだ？」

「知らない」

「…えーと、お前が俺を連れてこようとするとき、あいつは何か言ってたか？」

正直、めんどくさい会話だ。だが、鈴也は我慢強くだずねる。

「聞いてなかったからわからない」

「ん…まあ、無事そうだからいいか。で、お前はなんでこの家がわかったんだ？」

鈴也が、一番疑問だったことをたずねると、紫炎はきょとんと

した表情を見せる。整いすぎるほどに整った顔立ちには、あまりに合わない表情だった。

「『契約者』だからだが」

抑揚のない声ではあったが、どこか呆れたような雰囲気を感じる。鈴也としては、そんな反応をされる筋合いはないのに。

「『契約者』？ 鬼が人間と結ぶ、あの『契約』か？」

ろくに指導を受けていないとはいえ、鈴也も伏鬼衆のはしくれ。鬼にまつわる知識も、ある程度は持っている。自分の頭の中の引き出しをひっくり返して、『契約』に関する記憶を引っ張りだす。

鬼の中には、定期的な精気の供給を条件に、人間と共生関係を結ぶ者がいる。特定の相手の精気を鬼が気に入った場合や、相手に対して執着を示した場合、その『契約』は成立するという。

「俺、そんなの結んだ覚えはないんだけど」

確か昨日は、一方的に精気を吸われて気絶しただけだ。『契約』を結んだ覚えも、何かの約束を交わした覚えもまったくない。

「確かに『契約』した」

「待て待て、ちよつと、本気で覚えがないんだ」

そもそも鬼との『契約』なんて、どうやって結ぶかも知らないのに。と、そこに思い至ったとき、鈴也の胸をいやな予感が駆け抜けた。

「紫炎：念のために聞くが、『契約』ってどうやって結ぶんだ？」

「口約束して同意の上で精気を吸う」

鈴也が思っていたより、だいぶ手軽に結べるようだ。が、どう考えても『契約』を約束した覚えはない。

「鈴也が私に『死なないように守れ』といい、私は『了解』した。その後には私は鈴也の精気を吸った。『契約』完了だ」

「ちよつと待て！」

慌てて紫炎を静止。まったく記憶にないセリフが混じっている。

鈴也は昨日自分が発した言葉を、できるだけ正確に思い出そうと頭をひねる。紫炎と自分が交わした会話は…

——えーと…できれば死なないように、よろしく頼む。

——了解した。

「…あれ？ ちょっと待てよ」

あのセリフは、「精気は死なない程度に吸ってくれ、よろしく」という意味で言っただつもりだった。だが、言葉だけ抜き出してみると、確かに紫炎の言うように「死なないように守れ」という意味にも受け取れる。

「日本語って難しいなあ…」

「昨日の雌も、私の知らない言葉を叫んでいた」

紫炎が小さく頷きながらつぶやいた。感情に任せてわめきちらす貴子の言葉が聞き取れなかったのかもしれない。

「『ぶらしてないのに』とか『ぱんつみられた』とか」

「…それは覚えなくていいよ」

ちよつとした頭痛を覚えながら、改めて鈴也は紫炎を見る。見れば見るほど美しい。が、恐らくはどんな力を持っているのだろう。それぐらいは、伏鬼衆の端くれである自分にでもわかる。

ただ、自分と契約を交わした理由まではわからないが。

「まあ、死ななかつたからいいけどさ…でも、お前はよかつたのか？ 俺なんかと『契約』しちゃってさ」

「問題ない。ようやく、私の口に合う精気が見つかったのだ」

「どういうことだ？」

紫炎の端的な言葉を必死で要約すると、こういうことだ。

ものすごく大雑把に、鬼を人間に当てはめて言えば、紫炎はどんなでもないグルメなのだ。それも嗜好の問題ではなく、体質的に高い質の精気しか受け付けないという。これまで人間界をうろつきながら探し回って見たものの、彼女の眼鏡に叶う精気の持ち主はいなかったらしい。

そんなある夜、突然とてつもない芳香が彼女の鼻孔をくすぐった。そのタイミングは、はずみで貴子と密着した鈴也が、すっかり興奮してしまった瞬間と一致していた。紫炎はすぐさま香りをたどり、

2人がいた公園までやってきて——鈴也と出会ったのだ。

鈴也の全身から沸き立つ精気を見た瞬間、紫炎は彼との『契約』を望んだという。そこへ鈴也自身から『契約』の申し込み（誤解ではあるが）があり、迷わず受諾した。

「えーと……つまりは、貴重な食料だからゆっくり大事に食べるってことか？」

なんとなく複雑な気分で、鈴也は自分の置かれている状況を整理した。

こんな美女に見初められたのは光栄といえなくもないが、男ではなく食料として、という部分が釈然としない。相手が鬼であればやむをえないのか。

「てことは何だ、これから先、俺はちよつとずつ精気を搾り取られていくわけか……」

「死なない程度なら良いと言った」

「いや、まあ、言っただけさ」

一回きりと思ったから、という言葉を鈴也は飲み込んだ。

体がもつかな、という心配こそあるが、『契約』したこと自体については特に気にはならなかった。伏鬼衆としてのプライドなど、落ちこぼれの自分には関係のない話だし、目の前の鬼に対する恐怖もなぜか感じなかった。

と、そのとき。突然けたたましく鈴也の部屋のインターフォンが鳴り響いた。子供が連打しているかのような鳴らし方に心当たりがある。というより、この部屋を訪ねてくる人間など、他にいないのだが。

「げ……やっぱ来やがった」

『鈴也、いるんでしょ！？ 開けなさい！！』

インターフォンだけでなく、ドンドンとドアを叩く音まで響きだす。近所迷惑になることを恐れ、鈴也は重い腰を上げた。

4 (前書き)

ちよつと短め。

ここですばらく様子を見て、続きを書いてみたいと思います。

「おい、ちよつと静かにしてくれよ。周りに迷惑だろ…借金取りじやあるまいし」

ぶつぶつ言いながら、鈴也は玄関のカギを開ける。その瞬間、ドアを引つpegがすかの勢いで開けて、貴子が玄関になだれ込んできた。手には風呂敷に包んだ重箱を持っている。

「鈴也、無事なのね!？」

貴子は鈴也の顔を見るなり、その襟首をつかみ、顔を近づけてくる。無事じゃなかったら、2人して後ろに倒れてしまうほどの勢いだ。こういう時は、鈴也も貴子が自分を心配してくれているのではないかと思う。

「おかさんでな。どうしたんだよ、珍しくうちまで来るなんて」不思議なことに、貴子が突っかかってくるのも、御堂の家に連れ戻そうとするのも、鈴也が伏鬼に関わろうとしたときだけなのだ。自宅や学校にいる時、さらには刀を持っていないときには、特に干渉してはこない。

「あんたねえ…自分の従兄妹が鬼に連れ去られたの!？」気にして様子を見に来るのは当然でしょうが!！」

「ん…それもそうか」

「あと、ついでに…はいこれ」

ぐい、と鈴也に重箱を突きつける貴子。どうやら中身はお弁当のようだ。

「どうせロクなものを食べてないんでしょ」

慌てたようにまくし立てる貴子。何やら顔が赤い。まあ、普段悪し様に言っている鈴也を心配している事に対して、照れ隠しのようなものだと鈴也は認識する。

いずれにせよ、口ではいろいろ言いながら、何かと世話を焼くのが貴子という従兄妹の性分だ。これだから鈴也も、御堂家の一員と

はいえ貴子突き放すことができない。
と、そこへ。

「鈴也」

玄関から一向に戻らない鈴也の様子を伺うように、紫炎がぴょこんと顔を出す。『契約』自体が誤解とはいえ、彼女には鈴也を守る義務がある。一方、貴子は紫炎の顔を見るなり、つかみかからんばかりの勢いで、彼女に歩み寄っていく。

「あ、あんた！　なんでここに！！」

「敵襲か、鈴也？」

「ちよつと、無視するんじゃないわよ！」

どうせこれから、貴子には状況を説明しなければならないのだから。鈴也は、どう話せば自分への被害を減らすことができるのか、それだけを考えながら、リビングへと戻っていった。

「はあ！？　『契約』したあ！？」

リビングルームに、貴子の声が響き渡る。10畳ほどのスペースで、家具がほとんどないせいか、妙に音が反響する。驚きと怒りで言えば、7:3で驚きが勝っている。というより、まだ怒りの方向に意識がシフトしてないだけだろう。

「うん、そうらしい」

貴子がつけてきた弁当をかきこみながら、鈴也はこともなげに頷いた。いろいろ考えてみたが、事実だけを端的に述べることにした。紫炎は貴子にも弁当にも興味がならしく、鈴也に寄り添ったまま黙って座っている。

「そうらしいって、あんたねえ……！」

じよじよに怒りのボルテージが上がってきた気配を感じる。気のせいか、貴子の長い髪がざわざわと揺れているようにさえ見える。

「そんなつもりはなかったんだけど、成立しちゃったらしいし……あ、これうまい」

「ほんと？　それはちよつと自信あり……ってちがう……！」

「忙しい奴だな。しちゃったものはしょうがないだろ」

「しょうがなくなる!!」

ドン、とテーブルを叩き、貴子は鈴也に詰め寄った。

「いい？　いくらへなちよこでも、鈴也は伏鬼衆なの。それが鬼と『契約』するなんて、漁師が熱帯魚を飼うようなものでしょ！」

「それは別に個人の自由じゃないか？」

ポツリとつぶやく鈴也。貴子も自分のたえがおかしいことに気づいているのか、うつすらと頬が紅潮しているものの、気にせず続ける事にする。

「そんな事はいいの！　鈴也、仮にも御堂家に生まれた伏鬼衆の一人が、鬼と『契約』だなんて恥ずかしくないの？　昨日だって、あんな、キ、キスとかしちゃって！」

思い出して苛立ちが募ったのか、貴子はだん、だん、と机を叩く。「いや…あれはただ、精気を吸うための手段だろ？」

「この女はそうでも、鈴也はどうなのよ！　デレデレしちゃってたんでしょ、どうせ！」

「う……」

鬼とはいえ、これだけの美人とキスをしたのだ。鈴也としても心中穏やかではないが、それを素直に口に出すのは危険な気がした。

「待てよ、論点がずれてる。要するに、お前は俺が紫炎と戦わなかったことを責めてるんだろ？」

「あと、鬼にデレデレしてたことも責めてるわ」

「それは誤解…というか、冤罪だ」

話が進まないの、いったん言葉を切って仕切りなおす。

「戦ってどうにかなるとは、とても思えなかったんでな。お前を片手であしらうようなやつに、俺がどうこうできるわけないだろ」

ちらり、と鈴也は自分に寄り添う紫炎を見る。つられてそちらを見た貴子の眉が、きゅっと吊り上った。

「じゃあ何で、そんなにべったりくっついてるのよ、その女は」

「なんで、と言われてもな…おい、お前も何とか言えよ」

鈴也の言葉を受けて、紫炎はやっと目を開ける。めんどくさそうに眉をしかめたままではあったが。そして、ようやく口を開いたかと思うと、鈴也と貴子の思いもよらぬ言葉を吐き出した。

「私は鈴也なしでは生きていけない体になったんだ」

「はあああああ!？」

貴子の声が、またしてもリビングに響く。叫んだ後、呆然と鈴也を見ると、こちららはげんなりとうなだれている。

「なんでよりによって、そこだけ言うかな…」

「ちよつと鈴也、どういうことよ!! まさか…」

「鈴也ほどの精気、初めてだ」

「性器って、あ、あ、あんだ…」

「待て、何か2人のニュアンスが違ってる!」

会話の流れが怪しくなってきたので、慌てて鈴也が割って入った。

4（後書き）

少しは読んでもらえているようなので、
もう少し続けてみようかと思っています。

5（前書き）

主人公が動かない…ヒロインも動かない…
あ、ヒロインって貴子のことじゃないですよ。

「話はわかったわ」

貴子はお茶を一すすりしてから、ため息とともに言った。お茶は自分で淹れた。勝手知ったる鈴也の家、というやつだ。あえて紫炎の分は用意しなかったのだが、元よりお茶など必要としない紫炎にとっては、何の意味もないらしい。

嫌がらせが功を奏しなかったからなのか、貴子の表情は、納得という言葉からは程遠いが、とりあえずは誤解が解けただけでもよしとしよう。と、鈴也は小さく息を吐く。

「でも！」

だん、と貴子がテーブルを叩いた。気を抜きかけていた鈴也は、反射的に背筋を伸ばす。

「私はぜんぜん納得なんかしてないんだからね！！」

「まあ…そうだろうな」

本来、鬼を討伐する立場である伏鬼衆が、こともあるうに鬼の契約者になる。それだけでも異例中の異例であり、特に名門といわれる御堂家ではありえない。他の伏鬼衆に知られば、笑いものになるどころではすまないだろう。

「ほんとに、どこまで御堂の名を貶めれば気が済むのよ…」

目の前にいるのが、貴子以外の御堂家の者なら、その言葉の後に「お前たち親子は」と続くところだ。だが、貴子は鈴也の両親を悪く言ったことは一度もない。あくまで彼女が攻撃的なのは鈴也相手のみ。それも、伏鬼に関わるときのみだ。

要は、才能のない自分が伏鬼に関わることで、御堂の名が汚れることを恐れているのだと、鈴也は解釈している。

「そんなに言うなら、俺を御堂から追放すりゃいいじゃん」

鈴也はめんどくさそうにつぶやいた。

そもそも、本家を飛び出した時点で鈴也は御堂の名を捨てようと

思っていた。もともと御堂の家に未練はないし、そのネームバリユ―に頼る気もない。適当に母方の旧姓でも名乗ればいいと考えていたのだが、何故かそれは許されなかった。

「それは…名家には名家の体裁つてものがあるのよ。へなちよこだからって放り出したりすれば、それはそれで家の名前に傷がつくの」
言い分もわからないではないが、どこか言い訳がましい。

何せ、鈴也に御堂の名を捨てさせなかったのは、貴子自身なのだ。本家の後継者としての権限をフル活用して、居並ぶ御堂家の面々を説得（だと鈴也は聞いている。それ以上のことは知らない）した。もちろん、その理由は鈴也に伝えていない。伝えられるわけないでしょ、と思っている。

「だから！ 御堂家の次期頭首として、私はあんたを本家に連れ戻さなきゃいけないの」

まるで自分に言い聞かせるように、貴子は高らかに宣言する。その剣幕に、これまで閉じていた紫炎の切れ長の目が、すう、と細く開いた。

「な…何よ」

警戒心もあらわに、貴子が身構える。睨まれただけで、体が強張るのがわかった。

「お前…うるさい」

紫炎はそれだけ告げると、鈴也の顔を掴み、自分の方に向けた。文字通り人間離れた美貌の思わぬ接近に、鈴也も心臓の鼓動が抑えられない。

ドギマギしつつも身動きがとれない……とらない鈴也が、若干の期待を込めて紫炎の真っ赤な唇を見つめている。だが、この先に起こる出来事を予測していたのは、鈴也だけではなかった。

「すとーっぷー！！」

するり、と2人の唇の間に滑り込んだのは、貴子の右の手の平だった。鬼の拳動に対してインターセプトを成功させるあたり、貴子の反射神経もかなりのものだ。もっとも、その行為をなしたのは

反射神経だけではなかったのかもしれないが。

「んむ」

紫炎の不満そうな声と共に、ぶちゅ、と貴子の手の平と手の甲に、柔らかな感触が触れる。手の平が紫炎で、手の甲が鈴也の唇だ。

「！！！！」

自分でやっておいて、慌てて手を引つ込める貴子。うつすらと頬を染めながら、ぼうつと手の甲を見つめている。ちよつと残念そうな鈴也の顔は、視界に入っていないらしい。

「何をする」

「何をする、じゃないわよ！！　鈴也も何をされるがままになつてんの！？」

我に返つた貴子が叫ぶ。そんな状況でも、鈴也の唇が触れた手の甲を、そつと左手で押さえたりしているのだが、鈴也からはテーブルが邪魔で見えない。

「だから言ってるじゃん、俺の力で、こいつに逆らえるわけないんだって」

鈴也のどこかあきらめきつた物の言い方に、貴子はカチンとくる。「嘘言いなさい！　この鬼とまたキスできると思って、鼻の下伸ばしてたのは誰よ！？」

貴子の言葉に「無実だ」といえるだけの根拠が、鈴也にはなかった。なので、抗弁はするだけ無駄と判断する。

「ま、まあそれはそれとして、だ……」

鈴也にできるのは、話題の転換ぐらいのものだ。このままでは一向に話が進まないのも事実。というより、元から平行線を辿っているわけだが。

「俺としては、損な取引じゃないんだよなあ」

頭の後ろで手を組んで、こともなげに言う鈴也。カツと見開かれた貴子の目に怯えつつも、おずおずと言葉を続ける。

「ぶっちゃけ、俺って貴子の言う通りへなちよこだからさ、一人で伏鬼の仕事やるつつつても、やっぱ無理があるわけよ」

「そうね。だから本家に戻って、闘わないで生きればいいじゃない」
鈴也と貴子の間で、これまで何度も繰り返されてきたやりとりだ。
御堂の家にも、直接伏鬼の仕事に携わらない者がいる。アタツカ
ーとしての適正を認められない者、あるいはその力量が伏鬼衆とし
て未熟だと判断された者は、裏方として前線を補佐する役目に就く
のが普通だ。情報収集、作戦立案、あるいは政治的な駆け引きなど、
直接的に鬼と戦わなくても、できることは山ほどある。

「でも、それじゃアイツに復讐できないだろ」

「さらい、と鈴也は告げた。」

「忌野童子のこと……まだ諦めてないのね」

忌野童子……それは、かつて鈴也を狙った鬼の名だった。幼く、
そして今以上に何の力も持っていなかった鈴也を襲い、両親を殺し
た仇敵である。貴子は、鈴也がその鬼を追い求めて、伏鬼衆であり
続けていることを知っている。だからこそ、どんなに拒まれても鈴
也を本家に連れ戻す必要があるのだ。

鈴也の行動が、あまりに危ういがゆえに。

「何度も言ってるけど……私情で鬼に関わるのはやめなさい」

これまでになく真剣な声音で、貴子が告げる。

鬼は、人間の精気を糧としている。そして人間の精気は、感情に
よって大きく左右される。ちょっとした感情の動きが、鬼に強大な
力を与えてしまうこともあるのだ。忌野童子に対して、鈴也の両親
がそうであったように。

「感情を昂ぶらせて鬼と闘うことは、悲惨な結果を生むことになる
のよ」

貴子は、心から鈴也を心配しているのだろう。腕利きの伏鬼衆だ
った両親を倒すほどの鬼に挑んだところで、鈴也に勝ち目はない。

「だから、紫炎の力を借りるんだよ、貴子」

まっすぐに貴子の目を見つめながら、鈴也は静かな声で言った。

5（後書き）

またしてもちよつと短いですがかね。
感覚がつかめてないです。

6 (前書き)

回想です。短いです。

その鬼は、突然目の前に現れた。

小学校入学に備えて買ってもらったランドセルが嬉しくて、思わず背負ったまま家を飛び出した時のことだ。背中に感じるずっしりとした重みが、なんとなく大人っぽいような気がして、誇らしげに街中を歩いていた。浮かれた気分が、鈴也の足をいつもより、ほんの少し遠くまで運ばせていた。母親と一緒に行くいつものスーパーの数百メートル先ではないが、幼稚園児である鈴也の行動範囲からはわずかに外れていた。

「やあ、ぼうや」

突然背後からかけられた声に振り向くと、そこに痩せぎすの中年男がいた。うすよくれたコートを身にまとい、ぼさぼさの長髪がいかに怪しげ。もし、鈴也が御堂家に相応しい力を備えていたなら、その男が放つ異様な鬼気に気づいたのだろう。だが、その時の鈴也には、単なる中年男にしか見えなかった。

「こんにちは」

礼儀正しく挨拶する鈴也を見て、その鬼はにやあ…とべたついた笑みを浮かべた。うつすらと覗く歯が、まるで絵本で見たワニのようだったのを覚えている。

「ぼうや、いい匂いだねえ…いい匂い過ぎて、胸焼けしそうだ」

鈴也には、男の言葉の意味がさっぱりわからなかった。だが、男の口がゆっくりと、笑いをかたどったまま、耳まで裂けていくのを見て、やっと理解したのだ。目の前にいるのが、人間ではないことに。

がばあ、と開いた口が、鈴也に近づいた。むせ返るような悪臭が、男の口内から漂ってきた。

（にげなきゃ…たべられる…）

頭で理解していても、足が動かなかった。両親によって徹底的に鬼から遠ざけられていた鈴也は、鬼を見るのも鬼気に当てられるのも初めての経験だったのだ。

「鈴也あつ!!」

声の主が誰なのかを確認するより早く、ランドセルが、物凄い勢いで引つ張られた。次の瞬間、鈴也の小さな体は母親によって抱きすくめられていた。

「鈴也、無事か?!?」

父の声がした。だが、母親の胸にかき抱かれている鈴也からは、その姿は見えなかった。

「くくくくく…ようやく整った…」

鬼の声がする。

金属を打ち合うような音が、何度も響く。

父の苦しいような声がする。

母のうめくような声がする。

何が起こっているのか、鈴也には一切見えなかった。

「おかあさん、くるし…」

自分を抱く母の腕は、まるで万力のように固く、びくともしなかった。

びしゃつ。

鈴也の頭に水を掛けられたような感触が伝わった。それが額を伝い、地面にばたばたと落ちたとき、鈴也は息を呑んだ。その水が、真っ赤だったからだ。

どさりと、自分の体が母親ごと地面に倒れこんだ。ぴくりとも動かない母親の脇腹ごしに、さっきの中年男が立っているのが見えた。にい…と、耳まで裂けた口が笑っていた。

「ぼつやあ…やあつと食べごろの臭いになってきたねえ…」

父親が、中年男の腕に力なくぶら下がっていた。

「おとうさ…おか…さ…」

かすれるような声が、自分の喉からもれた。

「ん…いいねえ…絶望に彩られ、生きる氣力を失った子供の精気は。我ながら悪食だとは思うが…やめられないねえ…」

鈴也の耳には、その声がどこか遠く聞こえていた。何が起こっているのか、まったくわからなかった。

「おいで、ぼうやあ…」

男は鈴也の体を、母親の腕から引き剥がそうとしていた。鈴也は抵抗することも忘れ、ずるずると母親の体の下から引きずり出された。

母親の背中には、拳大の穴が開いていた。無造作に放り出された父親は、首が千切れかけていた。それでも鈴也には、両親に何が起こったのかを理解できなかった。

男に引きずられたまま、鈴也はぼんやりと動かなくなった両親を見ていた。遠くから駆け寄ってくる、和服姿の一団にも全く目を向けず。

男と和服姿の一団が争い始め、自分自身が地面に放り出されても、鈴也はじっと両親を見ていた。

それから和服姿の一団によって、御堂の本家に連れて行かれるまでの間のことを、鈴也は一切覚えていなかった。

鈴也を襲った鬼の名が『忌野童子』だと知ったのは、それから5年後のことだった。

7 (前書き)

ちよつとでも読んでくれる人がいると嬉しいです。

リビングルームを、静寂が包み込む。ひく…と、自分の喉がなるのを貴子は感じた。怒り、不安、焦燥…様々な感情が、自分の肉体を思うように動かしてくれない。

「両親の仇を討つのに、仇である鬼を利用しようっていうの？」

貴子は鋭い目つきで、正面から鈴也を見据えた。射すくめるような視線にも、だが鈴也の態度は揺るがなかった。

先ほどから鈴也に背中を預け、暇そうにしている紫炎も、貴子の言葉になんら反応を示さない。

「他に誰か、俺に力を貸してくれる人がいるのか？」

両親を失った鈴也を引き取ったのは御堂本家だが、彼らにできたのは忌野童子を現場から追い払うことだけだった。彼の鬼の行方を追ったわけでも、追撃をかけたわけでもない。

御堂本家が何をしてくれるというんだ。そう鈴也は言外に告げている。

「それは……」

本家での鈴也の扱いを考えれば、貴子が鈴也に返せる言葉はない。引き取られた鈴也に対する本家の態度は、徹底した『無視』だった。御堂の家に鈴也などという少年はおらず、忌野童子などという鬼に殺された夫婦もいないものとして扱われた。鈴也は屋敷の離れに放り込まれ、半ば軟禁に近い状態で、14歳までの時を過ごしたのだ。目の前にいる貴子と、鈴也の身の回りの世話をしてくれた、ただ一人の使用人を除いては、彼に一瞥さえくれるものはいなかった。

「いいんだ、別に今更、恨んじやないない」

鈴也の言葉には、まったく感情がこもっていなかった。

「俺はただ…アイツを殺してやりたいだけだよ、貴子」

鈴也の悲壮な決意——それは以前から知っていた。彼の能力を考えると、自殺行為としかいえないその悲願を、貴子もできることな

ら手助けしたいと思う。だが、御堂家の総意として「関わらない」と決定した以上、次期当主とはいえ覆す事はできない。

鈴也が御堂の名を名乗るかどうかとは、議論の次元が違うのだ。

「まあ、簡単には死なないだろ。紫炎が守ってくれるらしいし。そうだろ？」

鈴也が、自分と背中合わせに座っている美女を振り返る。

「話は終わったのか」

感情が希薄なせいでもわかり辛いけど、どうやら待ちかねていらしい。紫炎はいそいそと鈴也の正面に移動し、その顔を両手でつかんで、自らの顔を近づけ……

「だから待てつつってんのよ!!」

再び貴子の手の平に阻まれた。

「むう……」

ぷく、とわずかに紫炎の頬が膨らんだ。

(やべ、かわいい)

すんでのところで言葉を飲み込む鈴也。

「本当はすぐすぐ、すつつつつつつつごく納得いかないけど……契約のことは仕方ないわ」

すつ、と手の平を引っ込めて、ややうつむき加減に貴子は言った。

「いや、そもそも貴子の許可って必要ないんじゃない？」

「とにかく!!」

鈴也の反論を、ばん！と机を叩くことで一刀両断する。

「紫炎とか言ったわね……あんた!! 契約した以上は、ちゃんと鈴也のこと、守るんでしょね!？」

びしつ、と指を突きつける貴子。だが、紫炎はぷい、とその指から顔をそらす。食事をたびたび邪魔されて、拗ねているのだろうか。「いちいちム力つく鬼ねえ!!」

「まあまあ。紫炎だって、悪気はないんだって……たぶん」

そもそも、悪気という概念すらないような気もするが、いろいろ怖いのでとりなしておくことにする鈴也。

「あんたも!!」

今度は鈴也にびしつと指を突きつける。

「へ？ 俺？」

「この女にとつて、キ…キスなんてただの食事なんだから!! 変な勘違いしてんじゃないわよ。わかってんの!？」

「キスぐらい、どもらずに言えるようになれよ」

「うるさいのよっ!! それより、わかったの!？」

「へいへい」

「それならいいのよ。じゃあ、私は帰るから」

言いたいことだけ言うと、貴子は空になった重箱を引つつかんだ。感情的になつても、きっちり風呂敷に包み直す几帳面さに、鈴也は思わず苦笑をもらすのだった。

鈴也の住むマンションを出たところで、貴子は大きくため息をついた。

御堂家の者が鬼の契約者となつた。これは決して小さな出来事ではないし、両親に知れたら大変な騒ぎになるだろう。貴子がこうして時々鈴也の様子を伺うことすら、決断していい顔はされていない。「鈴也が御堂の名を汚さないか見張る」という名目で、かろうじて見逃されているに過ぎないのだ。

(まあ、でも…)

どうやら、貴子にとつての懸案事項は、非常に業腹ではあるけれど、あの憎らしい鬼が取り除いてくれるだろう。

貴子が鈴也の伏鬼を……特に、忌野童子への復讐を思い留まらせようとする理由はただ一つ。鈴也の身を案じているからだ。

彼の両親は優れた伏鬼衆だった。その2人が、鈴也をかばいながらとはいえ、なす術もなく殺されるような相手と闘えば、鈴也は間違ひなく死ぬ。彼がそれだけの技量しか備えていないことは、昔からわかっていた。元々才能に乏しい上に、ろくな修行も積ませてもらえなかったのだから、当たり前だ。

鈴也が復讐にこだわるのも無理はないと思う。伏鬼という忌まわしい世界を抜け、親子3人で掴んだ小さな幸せを、踏みにじられたのだ。本家に戻りさえしなければ、鈴也がいわれなき迫害を受けることもなかっただろう。

それでも、貴子は鈴也に死んでほしくなかったのだ。鈴也にとって本家は居心地が悪かるう。だが、自分が当主になりさえすれば、そんな空気はなくしてみせる。

そう思って、御堂家次期当主に選ばれるため、全てを投げ打って修行してきたのだから。

（だから…鈴也が無事でいてくれるなら…）
それでいい。と、思おうとしたのだが…。

（あの鬼とは、いずれ決着をつけなきゃいけないわね）
やっぱり、気に食わないものは気に食わないのであった。

7（後書き）

まだお話が進んでいないのでアレですが、
ご意見、ご感想など頂けると嬉しいです。

8（前書き）

気の抜けたアクションシーンをお届けします。

鬼と伏鬼衆という、本来ならば決して相容れない2人が、寂れた裏通りを並んで歩いている。

鈴也はいつものジーンズとジャケット姿で、手には白木の鞘に収まった刀を提げている。かつて父が使っていて、父の死後、御堂家に保管されていたところを、鈴也が勝手に持ち出した物だ。一方の紫炎は、闇を切り取ったかのような黒い衣をまとっているのみ。

午後11時。闘う術もなく、闇を恐れるだけの無力な人間は、家に閉じこもっている時間だ。もっとも、家のセキュリティをどれだけ厳重にしたところで、鬼に対抗できるというわけではないが。単に人間は、「鬼に目をつけられないため」だけに閉じこもるのだ。

「いないなあ、鬼……」

ぼつり、と鈴也がつぶやいた。

仇敵である忌野童子の手がかりをつかむため、あるいはおびき寄せるため、鈴也はフリーの伏鬼衆として活動を続けている。かれこれ3年ぐらいになるが、その間に倒した鬼の数は、優秀な伏鬼衆——それこそ貴子あたりが聞いたら、鼻で笑われそうな数だ。それも、大した力を持たない小物ばかり。

まず、鈴也には鬼の存在を感知する術がない。ただ闇雲に夜道を歩き、出会った鬼と闘うという、非常に効率の悪い方法をとっている。もちろん、好きでそんな作戦を取っているわけではないが。

次に、力の強い鬼を倒すほどの技量もない。闘ってみて、敵わない、と思ったら防御に徹し、隙について逃げる。そうやって、これまで生き延びてきた。

貴子が口を開くたびに「伏鬼をやめろ」というのも、無理からぬへなちょこぶりだ。

「鈴也は無力に加えて、変だ」

紫炎が、呆れたように言葉を紡ぐ。高級な鈴でも鳴っているかの

ような声だった。それだけに、地味に傷つく。

「言葉はもう少しオブラートに包んでくれ。それに、異常偏食者に言われたくないぞ」

「おぶらーと、とはなんだ？ 形のない言葉をどうやって包む？」
これ以上ないくらい真剣に問い返され、鈴也は大きいため息をついた。万事がこの調子なのだから、意思の疎通が取れているのかも怪しいものだ。

「…それよりさあ、お前、他の鬼の気配を感じたりできないの？」
めんどくさくなって、話題を転換。

「この付近に二人いるが」

「できるのかよ。で、どっち？」

すい…と、ほっそりした白い指を、後方に向ける紫炎。

「さっき通り過ぎた」

「早く言えよ！！ 戻るぞ」

くだらないやりとり。それでも、一人ではできないことだ。奇妙な充足感を胸に、鈴也は紫炎の示す方向へと走った。

目的地は、古びたビルが立ち並ぶオフィス街だった。獣のような臭いが充満しており、いかに感知能力の低い鈴也とて、ここまで近づけば異常に気がついただろう。

「何だあれ…熊？」

二人の視線の先にいたのは、鈴也の言うように熊に似た鬼だった。ただ、体毛はなく全身が鱗のようなものに覆われているので、一目で熊ではないとわかる。人間より一回り大きな体躯と、鋭い爪。額からは鬼の象徴たる角が、ちょこん、と生えている。

（あれ？ そういえば、紫炎って、角ないじゃん…って、そんな場合じゃないか。後で聞いてみようよう）

改めて、鈴也は意識を鬼に向ける。鬼はこちらに背中を向け、うずくまっている。時々頭が動くのは、恐らく何かを食べているからだろう。

「鬼って、人間の肉、食べるんだっけ？」

その場に似つかわしくない、呑気な口調で鈴也がたずねる。

「私は食べない」

「いや、お前の話じゃなくて……まあ、お前も鬼だけど……なんていうか、一般論として？」

「だから、私は食べない」

「食べる奴もいるってことか？」

こくん、と紫炎が黙って頷いた。どうやら、その鬼の食事風景に嫌悪感を示しているらしいことが、気配でわかった。紫炎から見れば、一心不乱にゲテモノを貪っているようにでも見えるのだろう。

「とりあえず、やってみっか」

すらり、と刀を抜き放ち、鈴也は無造作に鬼に向かって歩いていった。

「せいっ!!」

隙だらけの鬼の背中に、上段から袈裟懸けに斬りつける。だが、見た目どおりに硬い鱗に阻まれて、ろくに傷つけることもできなかった。

これが、鈴也が伏鬼衆としての才能がないと言われる所以である。たとえばこれが貴子なら、刃に靈力を流しこむことで、やすやすと鱗ごと鬼を切り裂いたに違いない。たとえ得物が錆びた包丁であったとしても、だ。

だが、鈴也の攻撃には靈力がほとんど込められていない。これは、鈴也に靈力がないというよりも、効率的な靈力の流し方がわからないからだ。元来センスがない上に、優秀な指導者もいなかったのが、当然といえば当然だ。

じつと見ていた紫炎からすれば、刀が折れなかったのが不思議なくらいだった。

「かつてえ……」

情けない表情で振り返る鈴也に、紫炎の口元がほんのかすかに動いた。どうやら、笑ったらしい。

「笑うなよ、こっちは一生懸命なんだぞ」

あまり一生懸命に見えない様子で、鈴也がつぶやいた。

「そんな芥のような鬼、斬らない方が難しい」

紫炎の言葉には遠慮がないが、しよげている場合でもない。さすがに鈍い下級の鬼といえども、いきなり背後から斬りつけられれば、敵の存在に気がつくというものだ。

のそり、とした動きで、体ごと鈴也の方を向く鬼。どうやら、食べていたのは野良猫のようだった。

ぐるる…と獣めいたうなり声をもらし、攻撃態勢に入る。どうやら、この鬼には知性のかけらも見られない。

「うゝん、こいつもハズレか。とてもアイツの居場所を知ってるとは思えないな」

この鬼が忌野童子と関係あるにせよ無いにせよ、情報を聞きだすのは不可能だろう。

「右腕」

紫炎が、ぼそりとつぶやいた。その直後、鬼の右腕がうなりをあげて、鈴也に向かって振り下ろされる。

「おっと」

鈴也は軽く身をひねると、鬼の攻撃を紙一重でかわしてみせる。

「うおゝ、当たったらただじゃ済まねえな」

「左腕」

紫炎の宣言どおり、今度は左腕が横殴りに振られた。その攻撃も、鈴也は体を“く”

の字に曲げることで、軽々と避ける。

「よく避ける……右腕」

鬼の攻撃をことごとく予想し、鈴也に告げている紫炎。だが、その助言も必要ないほどに、鈴也の体捌きは巧みだった。

何を隠そう、鈴也が他の伏鬼衆に勝っているのは、「避けること」だけなのだ。鬼に対する攻撃も防御も、霊力を使いこなす技量——もつと言え、天性の才能と、適切な指導の下でのたゆまぬ努力が

不可欠だ。だが、その全てを鈴也は与えられなかった。だが、避けるだけならば、一人でも訓練できた。動体視力と反射神経、あとは体を鍛えればよかった。御堂の離れにいた数年間、それだけをただ鍛錬し続けた結果、鈴也は人並み外れた「回避能力」だけを身に付けることができたのだ。

「があああああつ！！！！」

ひよいひよいと自分の攻撃をかわし続ける鈴也に苛立ったのか、鬼が咆哮をあげた。

「隙あり……てい」

咆哮を終え、鬼の顔が再び鈴也の方を向いた刹那。無造作に突き出した鈴也の刀が、鬼の右の眼球を貫いていた。

「ぐあうっ！！」

「おおっと、あぶね」

激痛のあまり、鬼が振り回した腕を、飛び退って避ける鈴也。が、その手に刀は握られていなかった。唯一の得物が、鬼の目に突き刺さったままだったのだ。

「ありや……しまった。どうしようかな……」

「鈴也……どいてくれ」

黙って見守っていた紫炎が、すい、と進み出た。

「永らく生きてきたが、これほど苛立つ戦いは初めて見た」

鈴也のあまりにちまきました闘い方は、感情の希薄な紫炎をして、苛立たしめたようだ。業を煮やしたように鈴也を押しつけ、鬼の前に立つ。

「ぐるるう……」

鬼の方は、新たな敵の出現に警戒しているのか、それとも紫炎のただならぬ鬼気を感じ、萎縮しているのか。低いうなり声を上げたり、動こうとしない。

「散れ」

紫炎の手が、引っかくような形で鬼の体をなでる。

「うわっ！！」

驚いたのは鈴也だ。紫炎が軽くなでただけに見えたのに、それだけで鬼の体は無数の肉片と化し、バラバラになって崩れ落ちたのだ。「南。水鳥拳みたいだな」

鈴也は、子供の頃に読んだ漫画を思い出し、素直に感嘆するのだった。

8（後書き）

主人公の無能振りが、私自身の予想を上回り始めました。
いや、予想じゃなくて、予定を。

9 (前書き)

短いですが、ちょっとキリのいいところまで
上げておきます。

よかったです感想ください。

「すまんね」

肉片となった鬼の頭部から刀を引き抜きながら、鈴也が告げる。

それに対する紫炎の返答は、きよとん、とした鈴也お気に入り表情。鈴也の言葉の意味するところが、理解できなかったのだろう。

「お前が俺と結んだ契約は、俺を守ることだけだろ。なのに結果的に、お前に同族殺しをさせることになっちまったからさ」

きゅ、と紫炎の細い眉根が寄った。ほんのわずかに。

「なんで怒るんだよ……？」

「心外だ。私はあんな芥と同族ではない」

「何かよくわからんが、鬼にもいろいろあるんだな」

ぎゅ、と、さらに深く紫炎の眉間にしわがよった。

「名誉を傷つけられた。謝罪を要求する」

「そんなにか！？ わかったよ、どうすりゃいいんだ？」

「代価を支払うのが妥当」

がしっ、と紫炎の手が、鈴也の顎を掴む。

「ちよっ……おま……ほんとは怒ってないだろ！？ ただ精気が欲しいだけじゃねえか……！」

「……ふ……」

「……ふ……」

ぐい、と引き寄せられた鈴也は、そのまま紫炎に唇を奪われた。

厳密に言つと、唇を介して精気を、だが。

「……ふ……」

ようやく離れていった紫炎の唇から、かすかな吐息が漏れる。たとえばようもなく妖艶ではあるが、正直その光景を楽しむ余裕など、鈴也には残されていない。

「……ふ……吸いすぎだ、馬鹿……」

かすむ視界の中で、につ、と紫炎が笑ったように見えたが、鈴也は気のせいだと思うことにした。

「あと…よろしく……」

意識が途切れる寸前の鈴也にできたのは、それを紫炎に伝えることだけだった。

「起きたか」

鈴也が目を開けると同時に、紫炎から声をかけられた。

「おお…既視観満点の挨拶、ご苦労さん」

そういえば初めて紫炎に精気を吸われた時も、こんな展開だったなーと、鈴也はぼんやりと思い出していた。といっても、一昨日のことだが。紫炎によって精気を吸われ、意識を失った鈴也は、今と同じように自宅のベッドに寝かされていたのだ。

「もう朝か…結局、一晚中眠っちまったんだな、俺…」
「いや」

紫炎が小さく首を振る。

「ん？ まさか24時間以上寝てたのか？」

「いや。鈴也は夜中に一度、目を覚ました」

「え、マジか？」

と、言われても、鈴也にはまるで覚えがない。

「“まじ”…とは何だ？」

「それはいいから。んで、またすぐ寝ちまったんだっけ？」
「こくん、とうなずく紫炎。」

「起きたところで食事したら、また寝てしまった」

「えゝ？ 飯なんか食ったっけ、俺？」

ふるふる、と今度は首を横に振る紫炎。

「食べたのは私」

「お前かよ！！ また吸ったのかよ！？ 俺を殺す気か！？」

思いのほか旺盛な紫炎の食欲に対して、さすがに身の危険を感じる。

「人は精気を吸いすぎると死ぬ……のか？」

「いや、聞かれても困るんだけどさ…死ぬんじゃない？」

鈴也の答えは、あくまで推測である。鬼についても伏鬼についても、極端な勉強不足である鈴也には、わからないことがあまりに多い。

ただ、今の勢いで精気を吸われ続けると、恐らくは近いうちに限界が来る、という予感があった。限界の先にあるのが、死なのか生殖不能になるのかは、わからないが。

とりあえず、詳しい事は今度、貴子に聞いてみよう、と決めた。

9（後書き）

現状、書いてあるところまで公開しときます。

一応、この先もプロットはできてますが

間が埋まってないので、ちょい更新に時間がかかるかもしれません。

よろしく。

10（前書き）

少し短いですが続きます

鈴也と紫炎が、『契約』という名の同棲生活を始めて3日目の朝。その間に、訪ねてきた貴子と紫炎の間で争いが起こること3回（つまり1日1回以上）、紫炎がすっかり加減を間違えて精気を吸いすぎ、鈴也が気絶すること2回（つまり毎日）。

テレビに興味を持った紫炎が、ボタンを押そうとしてリモコンを握りつぶしてしまうこと1回。デリバリーピザの配達員が、おもむろにドアを開けた紫炎の美貌に固まってしまい、ピザが冷めること1回（配達員は何故か、お金も受け取らずに帰っていった）。

トラブル続きではあるものの、それらはどれも鈴也の予想を大きく上回るほどのことは起こらなかった。そう、3日目の朝を迎えるまでは。

「——はあ？」

いつものように「起きたか、鈴也」という呼びかけを受けて、ベッド脇にいる紫炎に寝ぼけ眼を向けた鈴也は、そこに存在していたものを見て間の抜けた声を上げる。

ぺたり、と崩した正座で座り込んでいるのは、間違はなく紫炎だ。いつものように無表情に、赤い瞳で鈴也を見つめている。だが、その格好がいつも通りではなかった。

彼女が見に着けているのは、いつだったか、貴子が夕飯を作りに来たときに持ってきて、強引に置いていった白いエプロン。そしてその下は——全裸だった。

「わあっ！！　な、なにやってんだおまえ！？」

エプロンよりなお白い肌は、思わず喉がなるほど艶かしく、いつもの黒衣ではわかりづらかった胸のふくらみや腰の曲線までがはつきりと見て取れる。健康な青少年である鈴也には、あまりにも刺激の強い姿であった。

「作戦は成功」

紫炎は、希薄ながらはつきりと、満足そうに頷いた。

「な…なんだよ作戦って…って、お前その本…!？」

裸エプロンという凶器の前に気づくのが遅れたが、紫炎の手には一冊の雑誌が握られている。たまに訪れる貴子の目を逃れるために、押入れの天袋の奥にしまっておいたはずの、鈴也秘蔵の一冊だった。「人のエロ本、漁ってんじゃねえよ！ 返せ!!」

今すぐにベッドに穴を掘って入りたい気持ちを何とか抑え込み、鈴也は逆ギレでその場をしのごうとするが、目の前の鬼はそんな作戦が通用する相手ではなかった。

「大事な研究資料だ、まだ渡すわけにはいかん」

平然と言い返されては、鈴也としても轟沈するほかない。そもそも、今の紫炎の格好は鈴也の超弩級ストライクなのだ。強く出られるはずもない。

「なんの研究だ、なんの!？」

「愚問だ。鈴也を欲情させるための研究に決まっている」

「バカ野郎、欲情云々の前に、刺激が強すぎるわ!!」

「いいから、早く」

問答無用で、唇を突き出してくる紫炎。せっかく研究と準備を重ねて、鈴也を自分で欲情させることができた——食材を美味しく調理した、というべきか——のだから、味が劣化しないうちにご馳走になろう、という魂胆だ。

いずれにせよ、超絶美女がどストライクの格好で唇を突き出しているのだ。そんな状況を見逃せるような男がいようはずもない。鈴也は苛立ち半分、喜び半分の複雑な気分ながら、紫炎と唇を重ねるのだった。

だが、鈴也の予想に反して、精気を吸われている時間は短かった。「…ん？ どうした？」

すっ…と離れていく唇を、少しだけ名残惜しく思いながら、鈴也は訊ねる。朝から気絶するほど吸われても困るが、今のはずいぶん

と軽い食事だったのではないだろうか。

「吸いすぎると危険…なら、質を高めればいい」

そういえば先日、「精気を一気に吸いすぎるな」と紫炎に注意したのだった。どうやらこの鬼は、鈴也を自ら欲情させることで精気の質を高め、効率よく摂取する方法を思いついたようだ。そのためには鈴也が欲情しやすい状況を把握する必要がある、その資料として、隠していた秘蔵本が必要だった、ということだ。

「アホみたいな作戦だが…乗ってしまった以上は文句も言えないな…それにしても、どうやって見つけやがったんだ」

あんなに念入りに隠しておいたのに…とは、鈴也の心の声である。「『契約者』の思考を読むぐらい、造作もない」

そう言われて、初めて紫炎と出会った晩のことを思い出す。意識を失った鈴也を、彼女はこの家まで連れ帰っているのだ。行ったこともない家がわかるくらいなのだから、秘蔵本の隠し場所がわかってもおかしくはない……ような気がしないでもない。

「いやいや、ちょっと待て」

「？」

「だったら何も、エロ本を引っ張り出してくることないだろ？ 直接、俺の頭から

情報を読めばよかったんじゃないか」

「……あ」

紫炎も、自分がずいぶんと回りくどいことをしていたことに、遅まきながら気がついたようだった。

「なんだよ、エロ本は暴き出されるわ、自分の性的嗜好はさらされるわ、どんな羞恥プレイだよ朝っぱらから…」

げんなりと頭を垂れる鈴也。だがその反面、紫炎が自分の健康を気遣っていることに、喜びを感じる、思春期真っ盛りの青少年であった。

そのビルの周囲は、真つ黒な瘴気に澱んでいた。

ある一点を中心に禍々しい気配が渦巻き、建物の外にまで漏れ出している。

ビルの扉は取り外され、窓ガラスも大半が割れ落ちているので、その瘴気をさえぎるのはひび割れたコンクリートの壁ぐらいの物だ。

瓦礫が乱れるフロアの中心に、男は静かに座っていた。ボロボロになったオフィス用の椅子に、力なくもたれかかるような姿勢だった。

「まったく…困ったもんだねえ…」

粘ついた声が、その口元からこぼれ出る。

「せっかく…食いごろになってきたと思ったのに……」

その様子を誰かが見ていたなら、男が人間でない事にすぐ気がついただろう。薄く開いた男の口には、鋭い牙がびっしりと並んでいた。

「何だかおかしなヤツがくつついてやがる…一緒に食っちまってもいいんだがねえ…」

べろり、と異様に長い舌が、口の周りを嘗め回した。

「放っておいて、味が悪くなっちゃ元も子もないしねえ…」
ぎっ。

椅子が嫌な音をたててきしむ。男がゆっくりと立ち上がったのだ。「今の内に、ひっぺがしちまうか…その方が、もっと美味しくなるだろうしねえ…」

男はゆっくりと歩き出す。不思議な事に、足音は一切しない。

「待ってなよ、御堂のぼうやあ……」

男は音も無くビルを出て、そのまま闇の中に消えて行った。

10（後書き）

ご意見くださった方、読んで下っている方
いつもありがとうございます

11（前書き）

少し難産気味で、更新が遅れております。
もし続きを待ってくださっている方がいたら、
申し訳ありません

「さて、それじゃあ今夜も張り切っていきますか……」

まるで張り切っていない口調で、鈴也が紫炎に告げた。

いつものジーンズにジャケット、無造作に刀をひつつかみ、散歩にでも出かけるような様子だが、目的はもちろん散歩ではない。命を危険にさらす——仕事である。

厳密に言えば、仕事ではない。なぜなら、鈴也は伏鬼による収入をほぼ得ていないからだ。ただ両親の仇である鬼を探し歩き、見つけた鬼を倒す……依頼人のいない伏鬼の仕事に、報酬はない。わずかばかりの賃金が、定期的に御堂本家から振り込まれるのみだ。

それ以外は、両親の残してくれたお金を食いつぶしながら生きている。つまり、張り切ったところであまり意味はないという事になる。

「何となく鬼がいそうなところを、探してくれると助かるんだが？」
ちらり、と紫炎に目を向ける。

「……いやな匂いがする」

紫炎は、ベランダ方面に目を向け、わずかに鼻を引くつかせると、いまいましてに眉をひそめた。

「いやな匂い？ 鬼じゃなくてか？」

紫炎にしてはハッキリしない物言いに、鈴也が首をかしげていると、玄関からインターホンの音が響く。

「誰だよ、こんな時間に……って、貴子!？」

玄関の前で慄然とした表情を浮かべるのは、巫女装束に身を包んだ御堂貴子であった。

カギを開けると、ドアを引つpegがすかのような勢いで室内に入ってくる。

「やつぱり……これから出かけるところだったようね……」

「いや、まあそうだけど……いつもの事ながら、止めてもムダだぞ？」

いくら紫炎と契約して、危険が減ったとはいえ、貴子は鈴也が伏鬼の仕事を続けることには反対している。仕事は自分がやるから、鈴也はおとなしくしている、とても言いにくいのだろうと鈴也は思った。

「別に止めに来たわけじゃないわ。今日は、私があんた達に同行するのよ」

貴子の言葉は、鈴也の予想に反するものだった。

「はあ！？ 何だよ？」

「い…いいでしょ！ あの鬼の力がどんなものか、確認したいだけよ！」

「そんなもん、初日に思い知ってるじゃねえか…」

鈴也達が紫炎と初めて会った晩。貴子は紫炎の真つ向から挑み、苦もなく文字通り片手で捻られている。

「う…うるさいわね…あの鬼が暴走したりしないか、監視するのよ」

「…」
「何かコロコロ理由が変わってる気がするが…まあいいか。おい、紫炎…」

玄関先で論争していても始まらない。鈴也は紫炎を呼び、出発しようとする。

「紫炎…何やってんだ、お前？」

紫炎は、リビングからひよこり、と顔を出して鈴也と貴子のやりとりを見ていた。なぜか、その形のよい鼻をつまんだままで。

「いやな匂いの元がいる」

「いやな匂い？ ああ…さっき言ってたな。何だったんだ、結局？」

紫炎の白い指が、ぴつ、と貴子をさした。

「その雌の匂い」

その言葉を聞いた瞬間、貴子の顔が真つ赤に染まる。

「ちよつとあんた！ 鈴也の前で何て事言うのよ！」

「いや…俺の前とかそういう問題じゃないと思うんだが…」

「だって、ありえないでしょう！ 私は伏鬼の前には必ずお風呂で

略式の襖をしてるし、香だって炊いてるわ。変な匂いなんてするわけないじゃない！」

貴子が真っ赤なのは怒りなのか、羞恥なのか。恐らく前者だと鈴也は思った。それにしては、貴子の目にわずかな涙が滲んでいるような気がしたが。

「嘘だと思っなら、嗅いでみればいいじゃない！ ほら！」

「待て待て貴子、勢いでおかしな事言ってるぞ！」

ぐいぐいと身を押し付けてくる貴子から、鈴也はのけぞるうように身を遠ざける。

「な、何で逃げるのよ、まさか鈴也まで……」

「いや、だからそうじゃなくて……」

誤解を解こうにも、うまい言葉が浮かばない。

もちろん、鈴也が逃げたのは貴子が臭いからではない。先日的一件で、貴子が巫女装束の下にブラジャーを着けないと知ってしまった鈴也にとつて、この密着は危険きわまりないのだ。さらに、下手に欲情すると一発で紫炎にばれる。

（うつ…なんかいい匂いがする…）

「鈴也」

いつの間にか、紫炎は鈴也の背後まで歩み寄っていた。

「な、なんだよ……」

「わずかだが、精気の質が上がっている」

やっぱばれてる。鈴也の額を冷や汗が流れ落ちた。

「こつ…すれがいいのか」

むぎゅ、と背後から紫炎が抱きついてくる。前からは貴子がぐいぐいと。

「ちよつとあんた、何やってるのよ…？」

「お前が鈴也を欲情させられるなら、私にできないはずがない」

紫炎は眉間にしわを1本刻んだ表情のまま、貴子同様にぐいぐい体を押し付けてくる。前後から柔らかいものに挟まれて、幸せなのやら不幸なのやら、もはや鈴也自身にも判断がつかない。

「なあ…頼むから、早く出かけようぜ…」
いろいろと限界を迎えつつあった鈴也は、それだけを切り出すのが精一杯だった。

（疲れた……）

出がけの騒動を思い出し、鈴也は大きくため息をつく。

家を出てからも貴子からは「どう？ 私…臭くないよね？」とか、紫炎からは「せっかく質が上がったのに、なぜ吸わせてくれない」などと問い詰められた。

「貴子は臭くないし、いい匂いだ。紫炎、精気は仕事が終わってかな」

そう言っ て何とか2人をなだめすかし、夜の街に出てきたのだ。

それ以降、なぜだか貴子は機嫌がすこぶる良くなり、紫炎は無表情。どことなく、惘然とした雰囲気さえ感じられるが、鈴也は気にしないことにした。

「…で、鈴也。一応聞くだけ聞いておくけど、何かあてはあるの？」

貴子の疑問はもつともだ。だが、今更でもある。これまで鈴也の伏鬼活動に、あてがあつた事など一度も無いのだ。

「いや、特にない。鬼の気配なら、紫炎が感知できるけど…特定の相手となるとな」

「そうね…私もある程度の感知はできるけど…」

紫炎に張り合うように言っ てはみたものの、貴子には忌野童子の気配を探る事はできない。なぜなら、彼女は忌野童子に会つた事がないからだ。

「今のところ、この近くに鬼の気配は感じないわね」

「へえ…やっぱ貴子っ てすげえな」

「そ、そうでもないわよ…ちゃんと修行すれば、鈴也だつてできるようになるわ」

実力が認められたのが嬉しいのか、貴子がやや頬を赤らめる。

「それに、上級の鬼は気配を人間に紛れさせてるから……こんな大雑把な感知じゃ、大物は見つけられないかもしれないし……」

一口に鬼といっても、いろいろな鬼がいる。知性のない獣のような鬼、知性も理性も併せ持ち、人間と共存しようとする鬼。そして人間社会に紛れ込み、背後から人を襲う狡猾な鬼。最も危険度が高いのが、人間に紛れている鬼だといえる。探し出すのが困難な上に、そういった鬼は力も強いケースが多いのだ。

そして鈴也の探す忌野童子は、間違いなく危険な鬼だ。約10年もの間、数々の伏鬼衆の目から逃れ、あるいは退け続けているのだから。

「まあ、いつも通りブラつくしか……ん？」

気がつくと、紫炎が鈴也のジャケットの袖をつんつんと引っ張っていた。

「なんだ、どうかしたのか？」

「私の方がすごい」

「は？ 何が？」

「鬼の気配を探るのは、私の方がすごい。この雌よりも」

どうやら、紫炎は鈴也が貴子をはめた事が気に入らないらしい。

「あ、ああ……そうか……うん、そうかもな……えーと……」

（何なんだよこの流れは、もういい加減にしてくれよ……めんどくせえな……）

そんな心の声を押し隠し、事態の収束を試みる鈴也。

「すごいな、紫炎」

そう言いながら、真っ白な髪をぐりぐりと撫でる。

「……ふっ」

撫でられながら、紫炎がちらりと貴子を見た。口元が、ほんのわずかに笑いに彩られている。貴子には、それが優越感によるものだと直感できた。

「こっ、この……わ、私も……じゃなくてっ……」

自分も撫でろ、と言っには、貴子はややプライドが高すぎた。

「あんた！ いい加減に『この雌』呼ばわりは止めなさいよ！」
そう怒鳴るのが精一杯だった。

そんな時だった。

『やあ、久しぶりだねえ…ぼうやあ……』

貴子と紫炎の声の隙間を縫うようにして、そんな声が響いてきたのは――。

11（後書き）

そろそろ話を動かさないと…

その鬼は、かつて鈴也が見た時と同じ姿をしていた。

しわだらけでヨレヨレの、薄汚れたベージュのトレンチコートも、血色の悪いやせぎすの体も、ボサボサの髪も。そして、口内にびっしり並んだギザギザの牙も。

「っ……………」

忌野童子——鈴也が捜し求めてきた両親の仇。

「な…なんなの、こいつ…」

伏鬼において、鈴也の遙か上をいくはずの貴子さえ、思わず息を呑むほどの、不気味な鬼気が辺りを埋め尽くしていた。

「あいかわらず…極上の気だなあ…へひひひ…」

にたあ…と笑う不気味な表情を見た瞬間、鈴也の体から力が抜けそうになる。必死の思いで手に力を込め、刀を取り落とす事だけはまぬがれた。

「う…ああ…」

怒りと恐怖が、鈴也の胸中でせめぎ合っていた。

目の前に、憎い仇がいる。

鈴也から両親を奪い、御堂の家に閉じ込める原因となった存在。

鈴也が幼い頃から孤独を味わい、周りの人間に対して絶望を抱くようになったのは、この鬼のせいだと思って生きてきた。この鬼を倒せば、自分の中の劣等感が捨てられる。そして御堂の家に対する意地も、貴子に対するわだかまりも消え、御堂本家も自分の力を認めるはず。それだけを求め、探し続けた鬼だ。

だが、鈴也の足は動かなかった。指一本すら、自由には動かない。右手に握った刀が、まるで鉄の塊のように重い。

相手は鬼だ。自分よりはるかに能力の高かった両親でさえ、なすべなく殺された。怒りと恐怖に捕われた今の鈴也が、叶う相手ではない。

「ほうほう、ずいぶんとしなびた精気になったものだ…」

鬼が、ほくそ笑むように言った。神経を逆なでするような、甲高い声で。

「待ってたんだよお、坊やの精気がそんな風に、腐っていくのをさあぁ…」

「……………」

くくく…という細い笑い声が、鬼の喉からこぼれた。言葉も出ない鈴也に対し、まるで、笑いをこらえようとして、失敗しているかのようだ。

「どうにも俺の味覚は変わっていてなぁ…他の鬼が涎をたらすような、極上の精気は受け付けられないのさぁ…だからあの時は坊やの両親を殺したんだけどなぁ…ひひひ」

両親を殺された絶望から、鈴也の精気は生命力を失い、劣化するはずだった。いや、実際にしたのである。それを吸う直前に、忌野童子は御堂本家によって撃退されたのだ。

「口惜しいったらなかったぜえ？ …でも、俺は待ったんだ。再びお前に見え、その腐りきった精気を啜る日をなぁ」

じゅるり、といやな音がした。目の前の鬼が舌なめずりしたのだと理解するのに、しばらく時間がかかった。

「鈴也…鈴也！」

貴子が自分の肩を掴み、必死で呼んでいる。だが、その声も鈴也の耳には届かない。貴子は鈴也を後ろに下がらせ、忌野童子の前に進み出た。

「あんたが忌野童子ね…叔父様達を殺して、鈴也からすべてを奪った…！」

「いやいやぁ…ちがうよ、お嬢ちゃん…まだすべては奪ってないよぉ…」

粘ついたしゃべり方に、貴子は眉をしかめる。これほどまでに不快感を感じる鬼を、彼女は見た事がなかった。

「まだ坊やの精気は吸ってないからねえ…絶望に染まりきった、腐

った精気をさあ……」

「……あんた……本気で最っ低な鬼ね……！」

すらり、と貴子が逆手に持った小太刀を抜き放つ。

「ああ……お嬢ちゃんの精気もなかなかだなあ……どうすれば絶望してくれるかなあ……？」

べろり、と忌野童子が舌なめずりを見せる。

「坊やが死んだら……かなあ？」

その言葉が終わらぬうちに、貴子は駆け出していた。一瞬で忌野童子の懷に飛び込み、喉元めがけて小太刀を振るう。だが、忌野童子はその鋭い一撃を、のけぞってかわした。

「おお……怖い怖い……触れただけでも火傷しそうな法力だねえ……」

かわされたと知るや、貴子は素早く間合いを離し、身構えている。「でもねえ……坊やの精気の方が、美味そうだなあ……お嬢ちゃんが死んだら、もつと美味くなるんだろうねえ……」

ぞくり、と貴子の背筋が粟だった。

「坊やの周りの存在をぜんぶ殺したら、どれだけいい味になるかねえ？」

ちろり、と舌を覗かせながら、忌野童子が再び鈴也に視線を移す。

鈴也の口元からは、細い血の筋が流れていた。

「あああああああああ……！」

鈴也の絶叫。恐怖を払拭するため、自ら唇を噛み切った。震える全身に力を込め、刀を構える。

「くたばれええつ……！」

鈴也が忌野童子に向かって飛び込んでいく。タイミングも姿勢もあつたものではない、最悪の切り込みだった。元もとの実力不足に加え、感情に任せた攻撃だ。

「鈴也、無茶よ！」

がぎん、という鈍い音。肉を切った手ごたえなどまるでない。貴子の予測どおり、鈴也の刀は、鬼の皮膚一枚たりとも傷つける事はできなかった。

「ひはははあはは！ 非力だなあ、坊やあ！ 法力もない、技術もない、坊やにはなあゝんにもないからなあ！」

おかしくて仕方がない、と言いたげに、忌野童子は笑い出す。それは、鈴也に対する嘲笑のようでもあった。鈴也を、無力感と絶望の淵に叩き込もうとしているかのようだ。

「うわあああああつー！」

鈴也はめちやくちやに刀を振り回し、忌野童子を切りつける。だが、切れるのはよれよれのトレンチコートだけで、憎き鬼は涼しい顔をして鈴也を見下ろしていた。

「ざあんねんでしたあゝ、坊やじゃ無理だねえ……？」

いつの間にか、鈴也のでたらめな攻撃は止まっていた。忌野童子の右手が、鈴也の刀をしっかりと掴んでいる。

「思い上がった坊やには、ちよつと痛い目にあつてもらおう……」

忌野童子が、大きく手を振りかぶる。母の心臓を貫いた一撃を思い返し、鈴也が戦慄する。

「鈴也、離れてー！」

貴子が叫ぶが、鈴也の体はもはやいう事を聞かない。

その時。

「……おい」

今までずっと黙っていた紫炎が、初めて声を出した。その言葉は、忌野童子に向けられたものであるらしい。

「ああ？ なんだあお前……？」

忌野童子の問いには答えずに、紫炎はつかつかと鈴也に歩み寄り、その腕をぐい、と引つ張った。脱力した鈴也の体が、ぽすん、と紫炎に抱きとめられる。

「何するんだあ、べっぴんさんよあ……？」

「これは私のだ」

ぎゅ、と紫炎の眉間に深いしわが寄っている。

「せっかくの味が落ちたらどうしてくれる」

「……へえ……あんたも鬼かあ……同じ餌を狙う、ライバルってどこかあ

？」

その言葉に、紫炎の眉間のしわがより深くなった。

「らいばる……意味はわからないが、不快だ」

鈴也を掴んだ手と逆の手が、すつ、と忌野童子の方へ伸びた。

「おおっと！」

貴子の斬撃をかわした時より遙かに焦った様子で、忌野童子が大きく跳び退る。

「危ないねえ……いきなり心臓を狙ってくるなんて……」

紫炎の手は、さっきまで忌野童子の心臓があった空間にある。――撃で心臓を貫こうとしたらしい。

「私の食事を邪魔するなら……消す」

「へひひ……こっちも10年前から狙ってるんだ、諦められないねえ……」

黙ってにらみ合う2人の鬼。だが、静寂を破ったのは忌野童子だった。

「まあ、今日のところはおとなしく引き下がろうか……続きはまた今度にしようよ、坊や……」

それだけ言い残すと、忌野童子は音もなく闇にまぎれて消えた。

「鈴也……大丈夫？」

貴子が、慌てて紫炎の腕の中にいる鈴也に駆け寄った。

「……んだ……」

かすれるような鈴也の声。

「何で俺には……力がないんだ……なんで……」

暗く淀んだ瞳で、鈴也は誰にもなくつぶやいていた

「ねえ鈴也… やっぱりやめた方がいいわ」

忌野童子が立ち去ってしばらくした頃、不意に貴子が言った。ようやく鈴也も自分の足で歩けるようになっていたが、暗い表情は変わらない。紫炎は、当面の敵がいなくなった事もあってか、鈴也の体を解放し、その後ろに付き従っている。

「あいつは… 忌野童子は、鈴也の手には負えない相手よ」

鈴也の攻撃を涼しい顔で受けていたのはともかく、貴子の必殺の一撃でさえ、軽々とかわしてみせた。あの攻撃は、仮に刃を避けても、刀身に込めた法力により少なからずダメージを与えるはずだったのだ。だが、忌野童子はその法力が及ぶ範囲まで正確に見切り、紙一重でかわした。伏鬼のエリート御堂家の次期当主である貴子をして、強敵と言わざるを得ない。

「…… だから諦めるっていうのか…？」

「… だって見たでしょ？ 鈴也の攻撃は… 通用しなかったのよ？」
貴子の言葉に、鈴也は刀の柄をぎりつ、と握りしめる。攻撃の通用しない相手を、鈴谷が倒せるはずがない。貴子はそう言っているのだ。

「あの鬼は、いずれ御堂本家が責任を持って伏滅するわ。だから鈴也は…」

「家でおとなしく待ってろって？」

ぎろり、と鈴也が貴子を睨みつける。この淀んだ瞳を、貴子は見ることがあった。両親を失い、御堂本家に連れてこられた当初の鈴也は、ずっとこんな目をしていた。

「冗談じゃねえ！ これまで御堂が何をしてくれた！？ 俺を閉じ込めて、臭い物に蓋をしてきただけだろうが！」

鈴也に対する処置を決定したのは、現当主である貴子の父だ。その決定に反対するだけの発言力が、当時の貴子にはなかった。鈴也

が背負ってきた境遇に関して、貴子には何の責任もないのだ。

それでも、貴子に対する激情は留めようがなかった。貴子の言い分は正論であり、理性では理解できる。だが、感情がそれを許さなかった。

「ただ力がないってだけで俺達親子を放り出して、鬼に狙われても助けてくれやしなかった！ 父さんや母さんが殺されたつてのに、無かった事にされたんだ！」

「それは……」

「責任を持って伏滅だと！？ じゃあなぜ今まで責任を果たそうとしなかったんだ！」

鈴也は貴子の両肩を掴み、揺さぶるように問う。

「御堂は面倒事から目を逸らしたんだろう！ 俺からも、父さん達の死からも、忌野童子からも！ 大事な大事な、伏鬼名門の名を守るためにな！」

「鈴也…お願い、聞いて…」

「うるさい！ 御堂がやらないから、俺がやるんだ！ 貴子みたいな才能がなくても、やらなきゃいけないんだよ！」

もはや、それは八つ当たりと言っていい感情だった。御堂の家に對する恨み辛みを、貴子にぶつけるのはが筋違いだということも、鈴也にはわかつている。本当の怒りは、自分の無力さに向けられているという事も。

御堂の家を恨んでいないと言ったのも、才能ある貴子に対するゆがんだ感情も、押し隠すことができなくなっていた。こ忌野童子との再会をきっかけに、心の堤防が決壊したかのようにあふれ出してしまう。

「……このまま奴に挑んでも、負けは見えてるわ」

努めて冷静に、貴子は言った。鈴也の神経を逆撫でする結果になったとしても、言わなければならぬ事だと思ったから。

「わかつてるさ…さっき、嫌ってほどに思い知らされたから…」

鈴也がうつむいてつぶやく。その表情は貴子からは見えないが、

鈴也の声音には何か危険な響きが潜んでいるような気がした。

「もう……ほつといてくれよ……俺がどうなるうと、御堂には関係ないんだろ？」

ゆっくりと、鈴也が顔を上げた。うつろな表情が張り付いている。

貴子は鈴也の本心に気がつき、大きく息を呑んだ。

「鈴也……あなたまさか……」

「それ以上言わなくていい。貴子……俺にはもう関わるな」

自分の考えを口にしようとしたところを、鈴也は制止するうように言葉をつなぐ。口をつぐんだ貴子に背を向けて、ゆっくりと歩き出す鈴也。

「待って、鈴也！」

「うるさい、帰れ！」

はつきりとした拒絶の言葉。貴子は、鈴也のそんな態度を初めて見た。御堂本家にいた頃でさえ、鈴也は本気で貴子を遠ざけようとした事などなかったのだ。

「鈴也……」

遠ざかっていく鈴也の背中。その視界が、じんわりとにじんदैいく。

もう、鈴也には自分の声が届かないのだろうか。鈴也に刻まれた絶望は、それほどまでに深いのか。

気がつけば、ぼろぼろと涙がこぼれていた。

頑なな鈴也の心が悲しかった。

鈴也の閉ざされた心を開けない自分が悲しかった。

鈴也を失いたくないのに、止められない事が悲しかった。

そして何より悲しいのが、鈴也が両親の元に行きたがっている事だった。

立ち去った鈴也を追ってくるのは、紫炎だけだった。貴子は、別れた場所から一步も動いていない。よほどショックだったのだろう。恐らくは、怒っているのではないと、鈴也は気がついていていた。

「ごめんな、貴子……」

言わないつもりだった事まで、感情の爆発に任せて言ってしまった。貴子のせいではないことまで、全部彼女に押し付けてしまった。それでも、鈴也には貴子を遠ざけなければいけない理由があった。「俺の周りにいると…奴に狙われる…父さんや母さんみたいに…」忌野童子の目的は、鈴也の精気を自分好みの味に変えて吸い尽くす事。そのためには、鈴也の心が絶望に突き落とされなければならぬ。鈴也の周囲にいる存在、心の拠り所となる者を殺すのが、最も手っ取り早いとあの鬼は考えている。

このままそばにいれば、忌野童子は確実に貴子を狙う。それだけは避けたかった。

貴子は御堂の人間であり、御堂の考え方に染まっている。それでも、針のむしろのような御堂家での生活において、1人の人間として自分に接してくれた、かけがえのない存在なのだから。

「今日からここで暮らせ。勝手に外に出る事は許さん」

目の前で両親を失い、放心状態だった鈴也は、自宅から私物を持ち出す暇も無く、御堂家の伏鬼衆に連れられ、本家へとやってきた。そのまま屋敷の離れに当たる小屋に連行され、突き飛ばされるように放り込まれた。

突き飛ばしたのは、父の兄にあたる御堂家当主・御堂錦三。状況を説明されることもなく、自分がいる場所がどこかわからないままだった。

どうやら自分はこの家で生まれたいが、両親は鈴也が物心つくまえに出奔しているため、鈴谷に御堂家に関する記憶はなかった。「ここはどこですか…？ お父さんとお母さんは…？」

鈴也の質問に、解答代わりに返ってきたのは怒号だった。

「黙れ！」

これまで怒鳴られた事など一度もなかった鈴也にとって、それは

異常なまでの威圧感を持った声だった。

「この際だから言っておく。我が御堂家にとって、貴様の存在そのものが恥なのだ。鬼に遅れをとり、命を落とした貴様の両親もな。これ以上御堂家の名を汚すような事があれば、ただではすまんど。わかつたら、この中で大人しくしている。当主として、最低限の事はしてやる」

錦三はそれだけ言うと、鈴也に背中を向けた。そしてそのままの姿勢で告げる。

「わかつてると思うが、本家の敷居をまたぐ事も、本家の人間に気安く話しかける事も許さん」

錦三は鈴也の返事を聞く事もなく、勢いよく障子を閉めて立ち去っていった。それはまるで、鈴也と同じ空気を吸うのも嫌だ、といわんばかりだった。

それからの鈴也の生活は、軟禁とも言えるものだった。1人の家政婦だけがつけられ、勉強もすべて彼女から教わり、学校に通う事も許されなかった。鈴也の存在は世間から完全に秘匿されていたのだ。

毎日同じ時間に目覚め、同じ時間に食事を取り、勉強をして、同じ時間に眠る。そんな生活が1ヶ月続いていた。

そんなある日、鈴也は離れの庭に見慣れない人物を見つけた。自分と同じくらいの歳の女の子だった。綺麗に切りそろえられたストレートの黒髪に、巫女装束が妙に似合っている、可愛い女の子だった。

本家からこの離れを訪れる者は、これまで1人もいなかったで、不審に思っていると、

その子は自分を見て、につ、と笑いかけてきた。

「あなたが、鈴也？」

「……………」

鈴也は返事に窮していた。錦三に言われた言葉を忠実に守ってい

たからだ。

「返事くらいしたらどう？」

女の子は、きつ、と眉毛を吊り上げて口調を強めた。

「…本家の人に話しかけちゃ駄目だって言われてるから…」

「私から話しかけてるんだからいいのよ。鈴也は返事してるだけなの」

「なにそれ…」

複雑な表情を浮かべる鈴也の前で、女の子は悪戯っぽく笑って見せた。

それが、鈴也と貴子の出会いだった。

14（前書き）

貴子がメインヒロインみたいになってきました…
違うんです…

貴子がウザ過ぎるって意見があつたので、
ちょっと掘り下げてみただけなんです…

「私は御堂貴子。将来は御堂家の当主になるのよ」

初めて会った時、貴子は鈴也に向かって胸を張って言った。それだけで、彼女が『御堂』という名にプライドを持っている事が見て取れたが、鈴也はそんな事にはまったく興味がなかった。御堂家がどれほどの名家で、伏鬼衆の中でいかに力を持っているかを、知らなかったせいでもある。何より、自分や両親を『恥』だと言い切るような家を、好きになれるはずもない。

だから、毎日のように離れを訪れる貴子を、最初は少しわずらわしく思っていた。彼女は何かというところ『御堂家』の話をするからだ。それでも、変わり映えのしない日々の生活において、貴子の訪問は鈴也の密かな楽しみとなっていた。鈴也が、唯一対等に付き合える存在が、貴子だったのだ。

だが、いつの頃からか、2人の関係は対等ではなくなっていく。

鈴也の記憶によると、12歳ごろだっただろうか、貴子が離れを訪れる頻度が徐々に減っていったのだ。毎日だったのが3日に1度になり、週に1度に、そして月に1度に。

「ねえ早紀さん。最近、貴子来ないね…」

ある雨の日、鈴也は何気なく鈴也付きの家政婦に言った。

「そうですね…貴子様は本格的に伏鬼の修行に入られましたからお忙しいのでしょう」

少し迷ってから、早紀は貴子が来なくなった理由を、そう鈴也に告げた。

「ふつき？」

「特別な力を使って鬼を倒す業のことです。御堂家は伏鬼の名門で、貴子様は次期当主とも目される資質をお持ちですから…錦三様も熱心に指導してらっしゃるそうですよ」

「その力があれば、鬼を倒せるの……？」

「……素質次第では可能ですが……」

「……じゃあ、僕はだめなんだね」

鈴也は嘆息した。何かにつけて周囲から「力がない」「素質が無い」「落ちこぼれ」と言われ続けてきたのだ。今までは何の素質かわからなかったが、これで納得がいった。

「鈴也ぼっちゃま……」

「早紀さんも、伏鬼衆なの……？」

「……もともとはそうですね。今は仕事から遠ざかっておりますが」「そっか、早紀さんも才能があるんだね」

鈴也は早紀の方を見る事なく、窓の外を見ている。

「いいなあ、貴子は才能があつて……」

「鈴也ぼっちゃまは、伏鬼衆になりたいのですか？」

鈴也はぼんやりと降りしきる雨を見ながら、ふるふると首を振った。

「別に……なりたくないよ」

「では、なぜ貴子様を羨むのですか？」

「だって……」

空を見ていた視線を地面に落とし、鈴也が小さくつぶやく。

「才能があれば……いない人間じゃなくなるんでしょ」

自分は伏鬼の才能が無いから、親子ともども本家を出奔せざるを得なかった。そして、御堂家に戻ってきた自分に居場所がないのも、才能のなさゆえだ。自分に貴子のような才能があれば、こんな境遇に陥る事もなかったし、両親も失わずに済んだかもしれない。

日陰者として後ろ指をさされ続けた鈴也と、次期当主と期待される才能の持ち主である貴子。2人の距離は、その頃から自然と遠のいていった。

そして鈴也と貴子が14歳になったある日。3ヶ月ぶりに離れを訪れた貴子は愕然とする事になる。

鈴也の姿が、御堂家から忽然と消えていたのだ。

御堂家を飛び出した鈴也は、早紀から教わったわずかばかりの知識を元に、フリーの伏鬼衆となった。両親の仇をとるためでもあり、自分の存在意義を探すためでもあった。他の道は、考えられなかった。学校へも通わず生きてきた鈴也にとって、知っている職業は伏鬼衆しかなかったのだ。

実力のない、伏鬼衆としての生活には、何の希望もなかった。ただ盲目的に、親の仇を討つ事だけを考えながら過ごしていた。何よりも、貴子と同じ空間にいるのが辛かった。

貴子を妬み、才能のなさを恨む自分が許せなかった。

それでも、貴子と早紀の存在は、鈴也の人生において数少ない救いだったのだ。

（貴子を巻き込むわけにはいかない…）

忌野童子の力を見せ付けられた今、鈴也が考えられるのはそれだけだった。

自分の部屋に戻った鈴也は、疲弊した体を投げ出すようにベッドに横たわった。紫炎は、音も無くその傍らに腰かける。

切れ長の目が物問いたげに、じっと鈴也の顔を見つめている。

「なんだよ…何か言いたい事でもあるのか？」

鈴也は自分でも、心がささくれ立っているのを感じながら言った。まだ、忌野童子に対する恐怖が体に染み付いているようだ。

その恐怖を見透かしているかのように、目の前の美しい鬼は言った。

「鈴也があゝの鬼に勝つのは無理だ」

言われるまでもない事だが、今の鈴也には厳しすぎる一言。

「だったらどうだって言うんだ？」

「……困る」

「何が？」

「鈴也が死んだら、私が困る」

「食料として、だろ。いいさ、吸いたいんだろ？」

こくり、とうなづき、紫炎が口を近づけてくる。いつもなら、少なからずドキドキする瞬間ではあるのだが、今の鈴也はそれどころではなかった。

少しひんやりとした、柔らかい唇が重なっても、鈴也の意識は別のところにあった。

「……？」

すぐに唇を離し、紫炎が首を傾げる。

「どうした？」

「……味が落ちている」

「え？」

一度顔を離し、紫炎は横たわる鈴也に覆いかぶさってきた。

「お、おい……」

慌てる鈴也を無視するように、紫炎はその豊かな胸を、ぎゅっと鈴也の胸に押し付けてくる。

「な、何やってんだよ!？」

「……」

紫炎は黙ったまま、ぐりぐりと胸をすりつけてくる。どうやら、鈴也の精気の質を上げようとしているらしい。

「……だめだ」

紫炎が、わずかに眉尻を下げた。残念がっているようだ、鈴也としてはため息しかでない。長年の宿敵と再会し、力の差を痛感させられた直後なのだ。さすがにこの程度で欲情するほど、鈴也も単純ではない。

「悪いけど、今はそんな気分にはとてもなれないよ……」

「む……」

鈴也の反応に不満なのか、紫炎は体を離し、腕を組む。

「気に入らないんなら、無理に吸わなくていいぞ。俺はもう寝るか

らな」

鈴也はふてくされたように枕に顔をうずめ、部屋の電気を消した。疲れているせいか、睡魔はすぐに襲ってきた。

ややあつて、鈴也が寝息を立て始める。だが、それはとても安らかとは言えなかった。

「う……う……」

しきりに寝返りをうち、うなされるように声を上げ続ける鈴也。苦しげに眉をひそめ、食いしばった歯がぎりぎりと言を立てる。

そんな鈴也を見つめる紫炎の赤い瞳が、わずかに揺らめいている。

「あ……ああ……ああ……！」

鈴也が助けを求めるように、手を伸ばしてきた。

「……？」

鈴也に何が起こっているのか、紫炎には理解できなかった。紫炎は『契約者』として鈴也の思考を読む事ができるが、そこに渦巻く感情までは理解できなかったのだ。

ただわかるのは、鈴也が苦しんでいる事だけ。

（嫌な気持ち……どうすればなくなる……？）

考えを巡らせていた紫炎が、ふと何かを思いついたような表情を見せた。

（鈴也が私にした事……嫌な気分が消えた……）

紫炎の白い纖手が、ゆつくりと鈴也の頭に伸びる。そのまま、ゆつくりとその髪をなで始めた。

鈴也が自分の前で貴子を褒め、何となく気分が悪かった時、鈴也は自分の頭を撫でた。その時、何となく嫌な気分が薄れていったのを、紫炎は覚えていたのだ。

「う……」

紫炎は、そのまま朝まで、うなされる鈴也の頭を撫で続けた。

14（後書き）

うざくならず「持たざる者」の
心境を書くのは難しいですね…

15（前書き）

ちよつとずつ更新です。

ご意見、ご感想等あればお願いします。

目が覚めると、頭がだいぶすつきりしている事に、鈴也は気がついた。忌野童子と再会し、ささくれ立っていた気分がやや静まり、落ち着いているような気がする。

「嫌な夢を見ていた気がするんだけどな…」

不思議に思いながらも頭を軽く振って、意識を覚醒させる。さらに伸びをしてから、もう一度頭を枕に預ける。

「あれ…？」

枕の感触が、いつもと違っていた。ざりつとしたソバガラ感触はなく、柔らかいクッションのような、心地よい感触だった。

「起きたか、鈴也」

「わあっ！」

寝転んだままの鈴也の視界いっぱい、世にも美しい顔がある。

紫炎が、真上から鈴也の顔を覗き込んでいた。

「え…なんで紫炎が膝枕してるんだ…？」

柔らかいクッション…それは、紫炎の太ももだった。自分はずっと、ここで眠っていたようだ。いつもと感触が違うのも当然といえる。

ちなみに着ているのはいつもの黒衣。裸エプロンでないのが、安心するような、残念なような。もっとも、もし裸エプロンなら紫炎が精気を狙わないはずがないのだが。

「鈴也の願望だから」

「え…もしかして、思考を読んだのか？」

紫炎はこくん、とうなづいた。

「幼い鈴也が、誰かにこうされているのが見えた」

「うわあ…」

幼い頃…母親してもらった膝枕でも、夢に見ていたのだろうか。だんだん気恥ずかしくなって、鈴也は慌てて頭を起こす。

「重かつただろ…」

「これで精気の質が上がるなら、何ほどの事もない」

「お前、そればっかだよな…」

さらに、と抑揚のない声で返されて、思わず鈴也がうなだれた。
（そりゃそうだよな…俺は何を期待してるんだよ…紫炎にとって、俺は食料なんだ…貴子もそう言ってたじゃないか）

自分に無償の愛を捧げてくれる存在など、もういない。そんな事は、当たり前的事だ。特殊な環境で育てられてきた鈴也が、思ううのは無理からぬ事だった。

貴子が自分に構うのは、御堂家の面子のため。紫炎が自分を守るのは、質のよい精気を得るため。それ以上でもそれ以下でもない。そうじゃないと思いたい気持ちを抑え、鈴也は大きく息を吐いた。
「鈴也」

気持ち沈み込みそうになったところで、紫炎が突然呼びかけてきた。

「ん…なんだ？ 精気か？」

「今はいい」

ふるふると首を振る紫炎。

鈴也が了承しているにも関わらず、食指を動かさないとはい、珍しい事もあるものだ。鈴也は首を傾げて続きの言葉を待つ。

「外出を希望する」

「へ？ 外へ行きたいのか？」

こくり、とうなづく紫炎。突然の要求に、鈴也は戸惑いを隠せない。これまで、紫炎が鈴也に大して精気以外の要求をしてきた事はない。

「なんで急に？」

「気分転換…？」

「何で疑問系なんだ…というか、そもそもお前、何か気分を悪くする事でもあったのか？」

「私の気分は外出したぐらいで変わらない」

再びふるふると首を振りながら、平然と紫炎が言い放つ。

「転換すべきは鈴也の気分」

「俺の…？」

「そうだ」

「何でそうなる？」

紫炎の思考には、相変わらずついていけない。鈴也は首をひねった。さらに、『契約』によって思考が読めるのは、紫炎だけ、というのも微妙に納得がいかないのではあるが。

「非常に由々しき問題だ」

「えーと…何が？」

「鈴也の精気の質が、昨日から明らかに低下している」

紫炎に言われ、昨日の事を思い出す。誰よりも憎い両親の仇に出会いながら、何もできなかった絶望感。貴子にも紫炎にも、忌野童子には勝てないから諦める、と言われた無力感。恐らく、それが精気の質を落としているのだろう。

「だから…何だって言うんだよ…」

「……外で気分転換」

外出して、気を紛らわせようという事だろうか。紫炎にしては、まっとうな提案のように思えた。鈴也は腕を組み、しばし考え込む。「それぐらいで気分が変わるとは思えないけどな…まあ、いいか」このまま部屋で悶々としていたところで、事態が好転するわけでもない。紫炎を人目に晒し続けるのは少し気になるが、ここは紫炎の提案に乗ってみるのもいいかもしれない。

「わかった…シャワー浴びてくるから、ちょっと待ってろ」

鈴也の言葉に、紫炎は黙ってうなづいた。

「…で…何をしてるんだ、紫炎」

家を出て5分ほどたった頃、鈴也は我慢の限界を迎えて紫炎に訊ねた。

鈴也はいつものジーンズとジャケットスタイルだが、刀は持っていない。貴子辺りに見られたら、伏鬼衆としての心構えをこんこんと説かれるところだろうが…鈴也は伏鬼に出る時以外、武器は持ち歩かない。貴子の小太刀のように、おいそれと隠せる代物ではないという事も理由の1つだ。

「気分…転換？」

紫炎は、家を出てから今まで、ずっと鈴也の頭を撫で続けていた。「だから疑問系はやめろって。そもそも、気分転換と撫でるのと、何の関係があるんだよ？」

「私にもよくわからない」

女性にしては長身の紫炎は、鈴也とほぼ身長が変わらない。頭を撫でながら歩いても、歩きにくそうな気配はなかった。

「だが…撫でられると気分が落ち着く」

「……それは時と場合によりけりだろ」

「今はだめなのか？」

「だめっていうか…そういう問題じゃない」

奇妙なやりとりを続けながら歩く2人。いつしか、人通りの多い商店街にさしかかっていた。道行く人々はみな、紫炎の異様とも言える美貌に目を奪われ、足を止めているようだが、鈴也は気にしない事にした。

「……なら」

紫炎は一旦手を下ろし、鈴也の右手首を取る。

「な…何をする気だ？」

「……こう」

紫炎は鈴也の手首を掴んだまま、その手を自分の胸の膨らみへと運んで行く。

「待てえっ!!」

「……？」

必死に抵抗する鈴也。きょとん、とした表情を浮かべる紫炎だが、さすがに鈴也もその表情を楽しむ余裕がなかった。

「公衆の面前で何をする気だお前は！」

「気分転換」

「わかるように言え、わかるように！」

「女の胸を触って気分転換」

そう言いながらも、紫炎はぐいぐいと鈴也の手を引っ張ろうとしている。

「バカかお前は！ 俺が捕まるわー！」

「私の胸では効果がないのか？」

ないわけがない。ありすぎるほどあるだけに、鈴也は必死で抵抗しているのだ。

「そういう問題じゃねえ！ お前の言う気分転換ってのは、欲情の事か！？」

「……違うのか？」

言い争う2人の姿は、周囲からどんな目で見られているのか。

ある者はただ紫炎の美しさに見とれ……

ある者は紫炎の胸を触ろうとしている（ように見える）鈴也を羨み……

ある者は道端で不埒な行動に及ばんとする（ように見える）鈴也に眉をひそめる。

「違う！ 違わないかもしれないけど……今は違うと思いたい！ あと、周囲の目が痛い！」

「……周りの人間を消せばいいのか？」

「アホか！」

今度こそ、鈴也は力いっぱい手を引いて、紫炎の手を振り払う。

「む……」

きゅ、とわずかに紫炎の眉が寄った。恐らく、機嫌を損ねたに違いない。

「あ……いいか？ 言っとくけど、勝手に人を殺すな」

今更ではあるが、鈴也は紫炎が人間ではないという事を、改めて思い知っていた。鬼の価値観において、人間の命など大した意味を

持っていないからこそ、「周囲の人間を消す」などという発想が出るのだろ。鈴也は鬼と人間の間にある価値観のずれを、今まで言及してこなかった事を後悔していた。

「それは『契約』の範囲外だが」

鈴也と紫炎の間において交わされた契約は『死なないように守る代わりに精気を提供する』というものだ。つまり、紫炎が鈴也の指示に従う必要性はない。

「あえて殺すほどの事もなし。良いだろう」

「本当だろうな？」

「あくまで鈴也の命を優先した上でならばな」

「……まあ、とりあえずはそれでいいよ……」

多分に諦めを含んだ声色ながら、鈴也はそう言っとうなづいた。

設定資料（前書き）

キャラクターと用語のまとめを入れます。

一番重要なのは、名前の「読み」…ですかね。
「貴子」は「たかこ」じゃなかったんです、実は。

ルビを入れると携帯で見たときにズレるので、
入れなかったんですが…そして今更ですが。

ちなみに読まなくても別に不都合はないです。
「貴子」を「たかこ」と読んだところで問題ないし、
ここを読まなくてもわかるように

本編を書いていくつもりではありますので…

設定資料

【人物】

御堂鈴也
みどうしんや

年齢：17歳 身長：175センチ 体重：64キロ

まともに術も使えず、剣術も微妙な「伏鬼衆」の一員。伏鬼衆の名門御堂家次男を父に持つも、両親ともに出奔。隠遁生活中に両親と死別している。両親の死後は御堂本家の離れで、専属の家政婦と暮らしていたが、14歳の時に本家を出奔し、以後はフリーとして活動。だが特に目立った功績はない。精気の質がケタ外れに高く、紫炎に目を付けられた拳句、意図せずに共生関係を持ちかけて『契約者』となる。

剣術は攻撃が苦手なので御堂家から落ちこぼれ扱いされているが、実は防御に関しては自己流の修行により完璧に近い。ただ、攻撃できない伏鬼衆など意味がないので、落ちこぼれであることには変わらない。

本来は感情の起伏はあまり激しくないが、無感動なのではなく溜め込むタイプなだけ。

御堂本家により存在を秘匿されていたため、小学校以降学校には通った事がない。

紫炎
しえん

年齢：不詳 身長：172センチ 体重：測定不能

B 88cm ・ W 58cm ・ H 88cm（推定）

夜の公園で鈴也の精気に惹きつけられ、現れた『鬼』の女性。本来

ならば『鬼』の中でも飛び抜けた力を持つが、その反面、質の高い精気しか受け付けない体質。精気吸収に関しては口移し。相手を性的な興奮状態にさせると、より純度の高い精気が吸収できるが、そのための技術は持っていない。

感情の起伏が少なく、現在の所は鈴也以外の人間にはまったく興味が無い。外見的には大人っぽい高校生、瑞々しい20代前半の超絶美女。髪も肌も真っ白だが瞳と唇だけ血のように赤く、ゆつたりとした漆黒の衣装に身を包んでいる。

御堂貴子^{みどうたかね}

年齢：17歳 身長：165センチ 体重：実測50キロ

B 84cm ・ W 55cm ・ H 85cm

御堂家当主・御堂錦三（鈴也の父の兄）の1人娘で、鈴也にとっては従兄妹にあたる少女。術も剣技も鈴也をはるかにしのぐ実力の持ち主で、次期当主と目されている。御堂家の指令に反して己の**一存**^{わがままともいえ}で鈴也を連れ戻そうとするが、現状実現の見通しは立っていない。その理由は実力のない鈴也が「御堂家」に恥をかかせないため（とされている）。

鈴也に対する執着から、彼と『契約』を果たした紫炎を目の敵にしている。

貴子が当主を目指す最大の理由は、自らが当主となり、御堂一族による鈴也への不当な扱いを改めさせるため。

御堂家を背負って立つという気概がきつい態度をとらせているが、伏鬼と鈴也に関する事以外ではごく普通の少女。

御堂錦三^{みどうきんぞう}

年齢：48歳 身長170センチ 体重75キロ

現在回想にのみ登場。御堂家先代当主の長男であり、現当主。伏鬼

の名門一族である御堂家を取りまとめ、その名を守る事を第一と考えている。そのため、鬼に敗れた鈴也の両親や、伏鬼の才能を持たない鈴也を「恥」と言い切り、家名を守るためにその存在を徹底的に秘匿。鈴也を離れに軟禁し、醜聞が他家に知れ渡らないように計らった張本人。

高い技量を持つ伏鬼衆だが、自分以上の才能を持つ貴子に英才教育を施し、跡目を継がせようと思っている。娘の貴子がしばしば鈴也と接触している事が悩みの種。

いまわのこ
忌野童子

年齢：不詳 身長：188センチ 体重：測定不能

強大な力を持ちながら、卑怯な手段を好んで使う『鬼』。10年前（厳密には11年）、鈴也の上質の精気に目をつける。人間の絶望感に満ちた精気を好む、人間で言う「悪食家」であるため、鈴也の精気を貶めるためだけに両親を殺害した。人の心のスキにつける手段を特に好む。

【用語】

「鬼」

いつからともなく、人の世の闇に潜み蠢く異形の生物。物理的な食事は必要とせず、人の精気を吸って生きる事ができる。だが、一度人間の肉の味を知ってしまった『鬼』は、それ以後も人を襲い続ける事もある。外見は様々で、えてして巨体と強力を誇る。

「伏鬼衆」

鬼を殺す事を生業とする人々の総称。法力（または霊力）と呼ばれる力を駆使し、強靱な鬼に対抗する業を身に付けている。中でも御堂一族は強力な伏鬼衆を数多く排出してきた名門であり、伏鬼衆の世界では高い名声と信頼を集めている。

「契約」

定期的な精気の供給や、友好関係・恋愛関係といった理由から、共生契約を結んだ『鬼』と人間の関係を指す。大半の場合は需要と供給のバランスが合わず、人間が衰弱死するか鬼が弱体化、あるいは暴走するケースが多い。

より効率的に精気を吸収するために、『鬼』は契約した相手の好みや思考、性的嗜好をあるていど把握できるようになる。

多くの鬼にとって契約は「誇りを捨てる行為」として忌み嫌っており、契約を結んだ鬼に対して他の鬼は攻撃的であったり蔑視するようになる。

設定資料（後書き）

せっかく決めておいたので、
一応のせところと思っただけです。

ちなみに伏鬼衆の業や術に関しては
詳しい設定はありません。

さして重要な事ではないので考えませんでした。

16 (前書き)

ちょっと短めで…

2人がぶらぶらと町を歩き始めて、30分ほどもたっただろうか。気がつくと鈴也は、公園のベンチに紫炎と並んで腰かけるといいうちよつと変わった状況に陥っていた。

元々目的があつたわけでもないし、30分も歩けば少しは休憩しなくなる。さらに言えば、目的もなく歩き続けるなど苦痛以外の何物でもない。

少し休憩しようと、通りかかった公園のベンチに腰かけると、紫炎は黙つてその隣に腰かけたのだ。

「あのさ…」

黙つたまま座り続けるのに耐えられなくなった鈴也はが口を開く。

「何だ？」

「…なんか、異様に疲れたんだが…」

これまで言うに言えなかつた事を、ようやく鈴也は口にした。

「ただ歩いただけだが」

不思議そうに首を傾げる紫炎に、鈴也は「お前のせいだ！」と叫びたいのを必死で我慢した。

2人で歩くだけで異様に疲れた理由——それは、あまりにも紫炎が目立つからだつた。

声をかけてくる者はさすがにいなかったものの、通りすぎりに紫炎の美貌を直視してしまい、呆けてしまった男がいた。紫炎の全身から漏れ出す鬼気に気づき、泣き出す子供もいた（余談だが、それだけ敏感なら、伏鬼の素質は鈴也より上かもしれない）。さらに、向かってくる信号無視の車を紫炎が睨みつけ、運転手がハンドル操作を誤るといふ、一歩間違えば大惨事になるような事もあつた。

出かける前までは、軽いデート気分だった鈴也も、さすがにそれどころではないと考え直すしかなかった。

「だが…」

まじまじと、紫炎が鈴也の顔を覗きこむ。

「少し持ち直したようだ」

紫炎が言うのは、精気の質の事だろうか。

それはそうに違いない。ここに来るまでにあつた数々の騒動の中では、忌野童子の事を考える余裕など微塵もなかったのだ。

「そりゃ…何よりだったな」

「うむ」

鈴也の気のない言葉にうなづくと、紫炎はおもむろに鈴也の右手を掴む。思わずぎよっとする鈴也。紫炎が、掴んだ手を自分の胸の膨らみに運ぼうとしたのは、つい先ほどの事。鈴也が警戒するのも無理はない。

「ま…待て…そういうのは、家に帰ってから…」

慌てて言い募るが、紫炎は鈴也の手を握ったまま、それ以上動かそうとはしなかった。

「違う」

紫炎は静かに言った。

「私には鈴也の望みが見える」

「え…？」

紫炎の言わんとする事が、鈴也には理解できない。

「なぜこの行為を望むのかはわからないが」

不思議そうに、紫炎は？いだ手を見る。

「鈴也がこの手を『離されたくない』と感じているのはわかる」

「そうか…」

紫炎は、鈴也が頭の中で望んでいる事を、具体的に知る事ができる。2人が結んだ『契約』のもたらす効果によって。しかし、紫炎は人間ではなく『鬼』。人間ではないがゆえに、人間の感情を理解する事もできないし、同調する事もできない。つまり、鈴也の本当の望みや胸の内までは、理解する事ができない。

鈴也は両親が死んで以降、誰かに何かを期待する、という行為を

止めてしまった。誰も自分を見ない、誰も自分には興味を持たない、自分に何かを望んでいる人間もない。そう思い込む事で、御堂本家での軟禁生活乗り越えたのだ。

それは、貴子が離れに遊びに来なくなった事で、決定的になった。無論、貴子には貴子の事情があった事はわかつている。だが、それ以上に思い知ったのは、貴子と自分の立場の違いだった。

鈴也が望んだのは、伸ばした手を掴んでくれる存在であり、その手を離さないでいてくれる絆だ。御堂本家では望むべくもなかったものであり、学校にすら通わなかった鈴也が、これまでに手に入れる事が叶わなかったものだった。

紫炎はそんな鈴也の意識を、表面上でしか理解できない。だから、その望みを叶えるために彼女ができるのは、物理的に？いだ手を、離さないでいる事だけだった。

「…これも…絆って言えるのかね…」

鈴也は苦笑いしながら、紫炎の手を握り返した。

2人が結んだ『契約』の内容によれば、紫炎が鈴也の望みを叶える必要などない。死なないように守れば良いだけなのだから。にも関わらず、手を握ってくれる紫炎の存在が、鈴也にはありがたい。

貴子と距離を置いてしまった今となっては、なおさらの事だった。

「ありがとな、紫炎」

「礼の言葉はいい」

「え？」

「それより…頭を撫でるがいい」

「頭って…お前のか？」

黙ってうなづく紫炎。話の流れが理解できない鈴也だったが、とりあえずは言うとおりにしてみる事にした。

（まあ、感謝してるのは確かだしな）

鈴也は空いた手で、紫炎の白い髪を撫でた。

「む…」

「何だよ…言うとおりにしたのに、不満そうだな」

「不満ではない」

紫炎はそう言ったが、形のよい眉はわずかにひそめられている。

「が…満足感が予想より低い」

「何だそりゃ？」

「前回との違いはなんだというのか…？」

ぶつぶつとつぶやき始める紫炎。鈴也には、彼女の言っている事が1割も理解できなかった。だが、鈴也自身の行動を通して、人間とのコミュニケーションをを学ぼうとしているのだと、好意的に理解する事にした。

鈴也が異変に気づいたのは、忌野童子との邂逅から一週間ほどたった夜だった。

隙あらば鈴也の精気を吸おうとしていた紫炎が、妙に大人しいのだ。今までのように強引に精気を奪おうとも、鈴也を欲情させようともしてこない。ただ、何かの拍子にかすめとるように唇を合わせるだけで、以前のように鈴也が身の危険を感じるような事はなかった。もちろん、無駄に性癖を暴かれるような事もない。

（腹…減らないのかな…？）

鈴也としては好都合…というより安心だが、気にはなる。鬼にとって精気を吸うのは、人間で言う食事と同義なのだ。

（ダイエツト…なわけないよな）

それと同時に、紫炎があまり動かなくなった。元々少なかった口数はさらに減り、目を閉じてじっとしている事が多かったのだ。

「おい、紫炎…」

鈴也が声をかけても、紫炎は気だるげに片目を開けるだけで、特に返事をするでもない。

「お前…体の調子でも悪いのか？」

「節約」

めんどくさそうに、それだけを告げる紫炎。

鈴也から見れば、体調が悪くてまともに話せない状態にしか見えない。もっとも、顔色に関しては元が白すぎるので、よくわからないが。

「節約ってなんだ…？ 体力を温存してるってことか？」

小さなうなづき。

「要するに…腹が減るからできるだけ動かないようにしてるって事だよな？ だったら…精気を吸えばいいだろ。吸いすぎなければ問

題ないんだし」

一気に吸いすぎるな、とは言ったが、一切吸うなどは鈴也は言っていない。日常生活に支障がない程度なら、別に構わないと思っているのだ。

「重要な事実が発覚した」

どこか、重々しい口調だった。いつになく真剣——と言っても、鈴也にしかわからない程度の違いではあるが——な雰囲気、鈴也の喉がゴクリと鳴った。

「鈴也はどうやら、精気が変質にくい」

「……わかりやすく言ってくれ」

戸惑いを隠せずに、鈴也が早口で言う。

「なかなか質が上がらない」

「……」

人間の感情や状態によつて、精気の質が変化することは、鈴也でも知っていた。精気とはそもそも、生命の根源ともいえるものだ。だからこそ、生命力に直結する性的興奮状態にある時の精気こそが、最も良質で鬼が好むと言われている。そのために、被捕食者を性的に陵辱する鬼もいるぐらいなのだ。

それ以外にも、嬉しい時や楽しい時など、陽の感情が精気の質を高める。逆に、陰の感情に捕われれば精気の質は落ちる。

精気の質が陽の方向に変化しにくいということは、鈴也が感情の変化に乏しいということだ。御堂の家に引き取られてから、意識的に感情を殺してきたのだから、当然といえば当然なのかもしれない。「……つまり、期待外れってことか？　今の俺の精気じゃ、まずくて吸えないと？」

鈴也の声は、知らないうちに硬くなっていた。卑屈な考えだとは思ったが、紫炎も特に否定はしない。

「それでも、私には鈴也が必要だ」

「まずくても食料……だもんな」

紫炎の言葉は、鈴也にとって絶望をもたらすものでしかなかった。

代わりが見つからない限り、彼女は他者から精気を吸うことはしない。だから、自分をキープして命をつなごうというのだろう、と鈴也は思った。

幼い頃から、自分に対して何かを求められる事のなかった鈴也には、そういう発想しかできなかった。

「口に合えば誰でもよかった…」

鈴也はどこか、遠くを見るような目でつぶやいた。

（やっぱり…いや、それが当たり前だったんだ…）

鈴也は思う。自分が必要だと言われた事で、舞い上がってしまったのだと。紫炎が興味を示したのは鈴也の人間性でも何でもなく、ただ精気の質が好みに合ったただけなのに。

「バカだな…俺…貴子の言う通りだ」

両親以外と初めて交わしたキスは、食事のため。鈴也に執着したのも、守ってくれるのも、すべては上質の食糧として。2人で出かけた公園で、黙って手を握ってくれたのも、精気の質を落とさないためだったのだろう。

（それなのに、絆とか言って…ほんとバカだ）

御堂の家では、決して味わえない感覚だった。精気が目的だったとはいえ、紫炎は鈴也でないと駄目だと言った…いや、そうだと思っていた。

「精気の質が高いとか低いとか、そんなの俺は知らない…お前が鬼だっただけ、関係ないと思っちゃった…」

「…精気の質が落ちていく…なぜだ？」

「やっぱり…それだけなんだな。お前にとっての、俺の価値は」
あえて目を向けないようにしてただけで、本当は最初からわかっていて。それでも、誰かがそばにいる状態が嬉しくて、他愛無いやりとりが楽しくて。

だが、どうやら自分は、食糧としての価値すらなくなりかけているらしい。

「私が近くにいることが、精気の質を下げているのか？」

問い詰めるような気配はない。ただ、自分の知らないことをたずねているだけ、という雰囲気、紫炎が問いかけてくる。

誰かのせいにしたいわけじゃない。でも、我慢ができない。否定する事ができない。

「……了解した」

その一言を最後に、紫炎は鈴也の前から姿を消した。

そしてリビングには、鈴也を除いて誰もいなくなった。

貴子を遠ざけ、紫炎に去られ、鈴也は1人になった。

（……いや、元通りになったただけだ！俺は最初から1人だった。両親が死んだ、あの日から）

自分に言い聞かせるように心の中でつぶやき、鈴也は枕元の刀を握った。

17（後書き）

しゃきつとしない鈴也にイライラするでしょうが、
もう少し付き合ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2761w/>

落ちこぼれと美鬼

2011年10月18日12時00分発行